幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業

成果報告書

（令和４年度～令和６年度）

機　関　名：　高松市教育委員会

高松市総合教育センター

１．事業実施の目的

＜事業実施の目的＞

高松市では、０歳児から小学校第１学年までの教育・保育の充実を目指す『高松っ子いきいきプラン』（令和２年３月改訂）を推進し、公私立の就学前教育施設（幼稚園・こども園・保育所）と小学校の合同研修会（以下、『合同研修会』という）や、幼小連携教育に関する研究指定事業を実施してきた。しかし、子どもの学びを共有する連携やカリキュラムの編成には至っていない状況であった。

そこで、相互の子どもの育ちを理解し、子どもの学びをつなぎ伸長する幼小連携・接続を目指し、本市の連携・接続のテーマ・柱及び方針を次のように立て、開発校区の実践を基に研究を進めることとした。

【高松市がめざす連携・接続のテーマ】

「子どもの学びをつなぐ 持続可能な保こ幼小連携・接続」

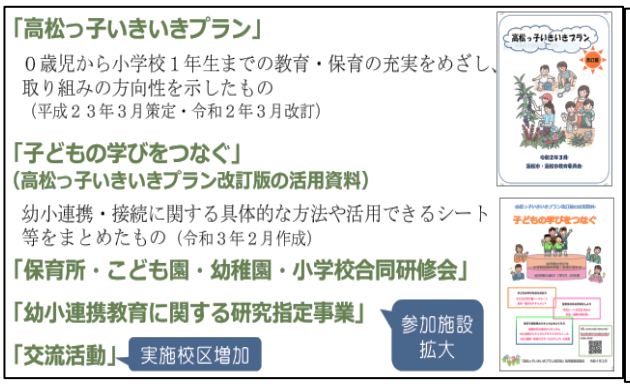
①気軽に対話できる教職員関係の構築

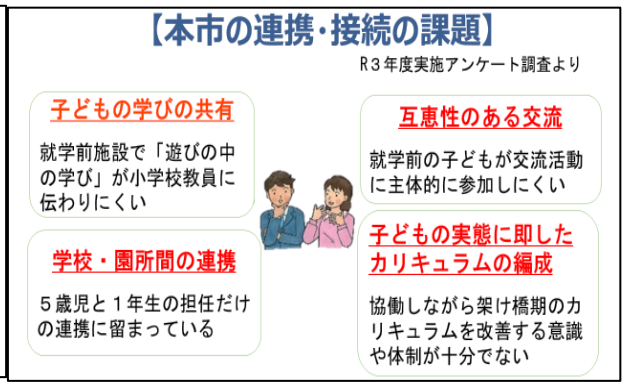
②子どもの学びの共有と分析

③連携校区の実態に即した架け橋期のカリキュラムの充実・改善

【架け橋期のカリキュラムに関する方針】

- ５歳児と１年生の学びを教職員が理解し、その学びをつなぎ伸長していくため、気軽に対話できる教職員関係を構築する。
- 架け橋期のカリキュラムを作って終わりではなく、子どもの姿を中心に対話し、共有した子どもの学びや支援、環境などを校区のカリキュラムとして反映させていく。
- 校区の架け橋期のカリキュラムは、地域の子どもの学びをつなぐカリキュラムであり、学校・園所が協働して作成していくことを管理職が理解し、管理職のリーダーシップのもと、学校・園所のカリキュラム・マネジメントとして取り組む。
- 学校・園所全体の取組となるように「地域の子どもを共に育てよう」という意識を醸成する。
- 地域の自然や文化、施設等を、校区で共有できる教材として取組に生かす。
- 市内全ての子どもたちの学びを保障するために、子どもに関わる開発校区や関係部局等の関係者が架け橋プログラムの推進方法を考え発信する。





＜園・小学校の施設数等＞

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	1	19	17	26	107	10	29	1	49	0
園児・児童数	50	424	2022	2240	4151	1243	3841	620	21225	0

２．事業実施に当たっての体制づくり

２－１．組織図・体制図

＜組織図・体制図＞

◇架け橋期のカリキュラムの開発等について協議する会議体。

令和６年度開発会議

【３年目　開発校区】

A校区	高松市立檀紙小学校	公
	高松市立檀紙幼稚園	公
	まゆみ幼稚園	私
	高松西保育園	私
B校区	高松市立香南小学校	公
	高松市香南こども園	公
C1校区	高松市立牟礼南小学校	公
	高松市はらこども園	公
C2校区	高松市立牟礼小学校	公
	高松市立田井保育所	公
	高松市立大町幼稚園	公
	八栗保育所	私
C3校区	高松市立牟礼北小学校	公
	高松市立栗山幼稚園	公
	高松市立牟礼保育所	公

【コーディネーター】

架け橋コーディネーター
架け橋コーディネーター

【有識者】

香川大学教授
香川大学教授
香川大学准教授

【事務局】

高松市教育委員会	総合教育センター	所長
		所長補佐
		幼児教育係長
		調整官
		指導主事(幼)
		指導主事(小)
		幼児教育指導員
	学校教育課	課長
		指導主事(幼)
		指導主事(幼)
		指導主事(小)

【連携部局】

高松市こども保育教育課 運営支援室	室長
	主幹
	主幹
香川県教育委員会義務教育課	
香川県総務学事課	

【管理職団体】

高松市立小学校長会
高松市立幼稚園・高松市こども園長会
高松市公立保育所長会

【協力団体】

香川県小学校教育研究会高松支部
高松市立幼稚園・高松市こども園教育研究会
高松市保育研究会

＜体制づくりの進め方＞

令和 2 年度から、高松市教育委員会高松市総合教育センター内に、幼児教育係を設置し、公立就学前施設教職員の研修の一元化を図っている。その中で、これまでも実施してきた「高松っ子いきいきプラン推進協議会」と「幼小連携教育に関する指定研究」の内容を合わせ、「高松市幼保小の架け橋カリキュラム開発会議」とした。

主担当は、幼児教育係が所属する高松市教育員会高松市総合教育センターとし、令和３年度末から関係部局に「幼保小の架け橋プログラム」の趣旨及び国からの支援を受けられるメリット、具体的な研究内容や方法について説明し、会議組織への参加の承諾を得た。

事業２年目より、幼保小の架け橋プログラムの取組を推進するため拡充、増員を行った。

【コーディネーター】１年目・・・・幼児教育関係者
２年目より・・元小学校長を増員　※小学校への支援
【助言者】　１年目・・・・香川大学より２名　３校区を担当
２年目より・・香川大学より３名　４～５校区を担当　※校区の拡充
【開発校区】　２年目より・・牟礼地域の小学校区の私立施設を含む。
２校区から３校区へ拡充
※牟礼地域の就学前施設から３つの小学校へ就学することから、牟礼校区全てで連携・接続を推進
２年目より・・開発校区の委員だけでなく管理職の会議に参加
※学校・園所全体のカリキュラム・マネジメント
【管理職団体】　２年目より・・公立小学校・公立就学前施設管理職の会議への参加
※管理職の理解の推進

２－２．協力園・協力校

＜協力園・協力校の概要＞

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園校のグループ
公立	小学校	檀紙小学校	590 名（小１：90 名）	A　R4～
公立	幼稚園	檀紙幼稚園	27 名（５歳児：6 名）	A　R4～
私立	幼稚園	まゆみ幼稚園	84 名（５歳児：32 名）	A　R4～
私立	保育園	高松西保育園	129 名（５歳児：25 名）	A　R4～
公立	小学校	香南小学校	291 名（小１：45 名）	B　R4～
公立	幼保連携型認定こども園	香南こども園	181 名（５歳児：45 名）	B　R4～
公立	小学校	牟礼南小学校	170 名（小１：25 名）	C（C1）R4～
公立	幼保連携型認定こども園	はらこども園	128 名（５歳児：31 名）	C（C1）R4～
公立	小学校	牟礼小学校	256 名（小１：31 名）	D（C2）R4～
公立	保育所	田井保育所	47 名（５歳児：11 名）	D（C2）R4～
公立	幼稚園	大町幼稚園	7 名（５歳児：3 名）	D（C2）R4～
私立	保育所	八栗保育所	66 名（５歳児：13 名）	D（C2）R5～
公立	小学校	牟礼北小学校	426 名（小１：74 名）	E（C3）R6～
公立	幼稚園	栗山幼稚園	28 名（５歳児：14 名）	E（C3）R6～
公立	保育所	牟礼保育所	105 名（５歳児：23 名）	E（C3）R6～

＜協力園・協力校の指定プロセス＞

【牟礼南校区】

令和３年度から幼小連携教育研究指定校区であったことから開発校区となった。

【牟礼校区・牟礼北校区】】

牟礼地域の就学前施設から、牟礼地域の３つの小学校等に就学していることから、牟礼地域の３小学校区全体での取組となるように推進した。私立保育所は、協力施設としての参加から、令和５年度より牟礼校区連携施設としての参加へと連携を進めた。

【香南校区】

香南こども園が、令和４年度開催の「全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会」の分科会「育みたい資質・能力を小学校につなぐ」の発表園として研究を進めていたことから開発校区となった。

【檀紙校区】

私立幼稚園の園長が私立幼稚園連盟会長であり、本プログラムに関する理解が得られた。

＜自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組＞

１年目は、各校区の実態や連携・接続の状況について事務局会議で確認し、コーディネート案を立て、事務局が会議内容や方法について提案し、準備、進行、記録を行った。２年目後半からは、校区の連携状況に応じて、校区の施設間で連絡を取り合い、協議の視点を相談しながら進められるようにサポートするようにした。

＜協力園と協力校同士の連携・協働の取組＞

校区毎に実施する「校区別会議」を設けたことで、管理職も参加し、管理職間の連携が進むと他の教職員間でも連絡が取りやすくなり、「ちょこっと交流」「ちょこっと参観」の積み重ねにより、気軽に対話できる関係が築かれた。そして、子どもの姿を基に子どもの発達や学びについて共有する中で、「共に地域の子どもを育てよう」という意識が高まった。

互いの子どもの状況や、学校・園所の生活の流れなどを知ることで、行事のための交流ではなく、子どもの意識や生活を大切にした交流の場を互いに考え、協働するようになった。

２－３．協力団体等

＜協力団体等の概要＞

団体等名	団体等の活動概要
香川大学	教員等養成、研修・研究協力
高松市立小学校長会	高松市内の公立小学校校長を会員とし、学校教育の課題改善を行い学校組織マネジメントの進展、充実を目的とする組織
高松市立幼稚園・高松市こども園長会	高松市内の公立幼稚園・こども園園長を会員とし、就学前教育の課題改善、組織マネジメントの進展、充実を目的とする組織
高松市公立保育所長会	高松市内の公立保育所長を会員とし、保育・教育の課題改善、組織マネジメントの進展、充実を目的とする組織
香川県小学校教育研究会高松支部	小学校教職員を会員とし、7支部、23部会が設けられ、香川県小学校教育の振興を目的とする研究組織
高松市立幼稚園・高松市こども園教育研究会	高松市内の公立幼稚園、こども園教職員を会員とし、専門研修、実践研修等を実施し、幼児教育の振興を目的とする研究組織
高松市保育研究会	高松市内の公私立保育所（園）職員を会員とし、各種研修会を実施し、乳幼児保育の振興を目的とする研究組織

＜各協力団体等との連携＞

学校・園所全体の連携・接続となるために、管理職の架け橋プログラムに関する理解、管理職間の連携、カリキュラム・マネジメントが重要であることが分かり、令和５年度から、開発会議へ、開発校区の管理職の参加を推進した。

令和５年度の開発校区の管理職の取組を広げるため、公立の管理職団体の参加を推進し、各学校種の管理職研修会等で、連携・接続の取組を啓発できるようにした。

開発会議では、関係部局と管理職団体の代表者間で、それぞれの取組やその成果、市内全ての校区への普及方法などについて情報交換を行った。

私立施設の代表者も含めた情報共有も今後必要である。

【高松市立小学校長会】

各小学校において保こ幼・小連携・接続の取組が具体的に進み、架け橋期のカリキュラムも年々検証を重ねられている。今後、公私立の就学前施設と連携・協働しながら、生活科や特別活動の部会研究とタイアップし架け橋期のカリキュラムの改善を図っていきたい。

【高松市立幼稚園・こども園長会】

市園長会連携研究部会を中心に開発校区および各園の取組について協議してきた。開発校区の研修会への参加やコーディネーター派遣を活用し、各校区の実態に応じた連携を進めている。園長の交流活動や研修への積極的参加、小学校管理職との関係性の構築等の意識をさらに高め、子どもの学びをつなぐ持続可能な取組を推進していきたい。

【高松市公立保育所長会】

所長会の機会等で、開発校区の所長に取組の成果や課題を報告してもらい、幼児教育と小学校教育のつながりについて情報交換を行った。その情報を所内で共有し、職員の「学びの連続」に関する意識向上につなげたい。また、各校区での「顔の見える関係」作りを所長が率先して行い、今まで以上に保こ幼小の連携を進めていきたい。

２－４．架け橋期のコーディネーター等

＜架け橋期のコーディネーター等の概要＞

新規／継続	事業に関わった年度	役職名	経歴
新規	令和４～６年度	架け橋期のコーディネーター	元幼稚園・こども園長 市こども園運営課補佐 市総合教育センター主幹
新規	令和５～６年度	架け橋期のコーディネーター	元小学校長

＜架け橋期のコーディネーター等の役割等＞

令和４年度は、幼稚園・こども園の園長や教育委員会及び健康福祉局での勤務経験があり、幼小連携教育に関する研修を実施してきた者にコーディネーターを依頼した。

令和５年度からは、開発校区の元校長にもコーディネーターを依頼し、幼児教育経験者と小学校教育経験者の二人体制とした。

【事務局会議・校区別会議・全体会議】

・事務局とコーディネーターが、各校区の実態を把握し、校区の連携・接続の状況に応じたコーディネート案を立て、校区別会議等の進行やグループ協議のファシリテーターを行った。会議後には、成果や課題、改善策を共有した。

①連携校区に出向き、実態や情報を収集する。
②連携校区の実態に合わせ、その年の連携・接続の目標やサポート内容について協議する。
③「校区の共に育てたい子どもの姿」を共有できる状況づくりをする。
④校区の教職員の誰もが遠慮なく意見を伝え、共有したり、考え方の相違を受け止めたりしながら、よりよい関係や取組につながるような調整をする。
⑤「学びをつなぐ持続可能な連携・接続」という研究の目的を方向付ける。
⑥子どもや教職員にとって、連携・接続の有効性が共有できるような協議にする。
⑦校区全体での取組になるような体制づくりをする。

・活用シートの改善や活用方法、まとめ冊子の内容検討を行った。

【保こ幼小合同研修会】

・座談会（開発校区の取組紹介）のファシリテーター

【基本研修・校内研修・研究協議会講話】

・架け橋プログラムの趣旨や、学びのつながりについての説明や実践事例の紹介

３．架け橋期のカリキュラム開発会議

３－１．会議委員等

＜会議委員一覧＞

会議の代表者氏名	真鍋　康秀		他６４名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
真鍋　紀美子	架け橋コーディネーター	企画・運営・研究 調査・指導	令和４年７月～令和７年３月
平野　希代子	架け橋コーディネーター	企画・運営・研究 調査・指導	令和５年４月～令和７年３月
片岡　元子	香川大学教育学部・教授	企画・研究・指導	令和４年７月～令和７年３月
松井　剛太	香川大学教育学部・准教授	企画・研究・指導	令和４年７月～令和７年３月
松本　博雄	香川大学教育学部・教授	企画・研究・指導	令和５年４月～令和７年３月
植松　浩美	檀紙小学校・教諭	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和５年３月 令和６年４月～令和７年３月
土井　あずさ	檀紙小学校・教諭	実践・開発・連携 協議	令和５年４月～令和６年３月
石尾　知子	檀紙幼稚園・教諭	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和６年３月
椎木　香央里	檀紙幼稚園・教諭	実践・開発・連携 協議	令和６年４月～令和７年３月
黒田　孝子	まゆみ幼稚園・主任教諭	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和７年３月
池田　美佐江 （十河右子）	高松西保育園・ 主任保育士（副園長）	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和５年３月
藤本　愛子	高松西保育園・主任保育士	実践・開発・連携 協議	令和５年４月～令和６年３月
坂井　成津美	高松西保育園・主任保育士	実践・開発・連携 協議	令和６年４月～令和７年３月
岡村　晴子	香南小学校・教諭	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和６年３月
荒井　直子	香南小学校・教諭	実践・開発・連携 協議	令和６年４月～令和７年３月
木下　るみ子	香南こども園・保育教諭	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和５年３月
髙松　明子	香南こども園・保育教諭	実践・開発・連携 協議	令和５年４月～令和７年３月
平井　アイ子	牟礼南小学校・教諭	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和６年３月
山口　誠博	牟礼南小学校・教諭	実践・開発・連携 協議	令和６年４月～令和７年３月
川端　陽子	はらこども園・保育教諭	実践・開発・連携 協議	令和４年７月～令和５年３月
平田　恵美	はらこども園・保育教諭	実践・開発・連携 協議	令和５年４月～令和７年３月

山下　恵美子	牟礼小学校・教諭	実践・開発・連携協議	令和４年７月～令和６年３月
谷口　明	牟礼小学校・教諭	実践・開発・連携協議	令和６年４月～令和７年３月
山下　真実	大町幼稚園・園長	実践・開発・連携協議	令和５年４月～令和６年３月
酒巻　知代	田井保育所・保育士	実践・開発・連携協議	令和４年７月～令和５年３月
石川　幸子	田井保育所・保育士	実践・開発・連携協議	令和５年４月～令和６年３月
安部　めぐみ	大町幼稚園・教諭（田井保育所）	実践・開発・連携協議	令和６年４月～令和７年３月
川東　美穂	八栗保育所・保育士	実践・開発・連携協議	令和５年４月～令和６年３月
中川　智美	八栗保育所・保育士	実践・開発・連携協議	令和６年４月～令和７年３月
大川　祐子	牟礼北小学校・指導教諭	実践・開発・連携協議	令和６年４月～令和７年３月
末包　修史	栗山幼稚園・教諭	実践・開発・連携協議	令和６年４月～令和７年３月
河田　静	牟礼保育所・保育士	実践・開発・連携協議	令和６年４月～令和７年３月
池田　茂樹	高松市立小学校長会・代表	市立小学校、研究協議会等での取組推進	令和６年４月～令和７年３月
岡本　圭美	高松市立幼稚園・こども園長会・代表	市立幼稚園・こども園、研究協議会等での取組推進	令和６年４月～令和７年３月
大前　昭代	高松市公立保育所長会・代表	市立保育所等での取組推進	令和６年４月～令和７年３月
宮脇　充広	高松市教育委員会高松市総合教育センター・所長	会議代表	令和４年７月～令和６年３月
真鍋　康秀	高松市教育委員会高松市総合教育センター・所長	会議代表	令和６年４月～令和７年３月
遠藤　智子	高松市教育委員会高松市総合教育センター・所長補佐	企画・運営 研究・指導	令和４年７月～令和７年３月
川田　智子	高松市教育委員会高松市総合教育センター・幼児教育係長	運営・会計 研究・指導	令和４年７月～令和７年３月
河田　祥司	高松市教育委員会高松市総合教育センター・研修係長	研究・指導	令和４年７月～令和６年３月
南　真由美	高松市教育委員会高松市総合教育センター・調整官	運営・調査・研究	令和６年４月～令和７年３月
宮本　英津子	高松市教育委員会高松市総合教育センター・指導主事	運営・調査・指導 研究	令和４年７月～令和５年３月
川端　陽子	高松市教育委員会高松市総合教育センター・指導主事	運営・調査・指導 研究	令和５年４月～令和７年３月
葛西　久美子	高松市教育委員会高松市総合教育センター・指導主事	研究・指導	令和４年７月～令和５年３月
大西　美輪	高松市教育委員会高松市総合教育センター・指導主事	研究・指導	令和５年４月～令和６年３月
前場　智美	高松市教育委員会高松市総合教育センター・指導主事	研究・指導	令和６年４月～令和７年３月

鶴羽　美緒	高松市教育委員会高松市総合教育センター・指導主事	研究・指導	令和６年４月～令和７年３月
宮脇　智子	高松市教育委員会高松市総合教育センター・主任保育教育士	運営・調査・研究	令和４年７月～令和６年３月
細川　洋一	高松市教育委員会高松市総合教育センター・幼児教育指導員	運営・調査・研究	令和４年７月～令和５年３月
黒川　康代	高松市教育委員会高松市総合教育センター・幼児教育指導員	運営・調査・研究	令和５年４月～令和７年３月
山地　芳樹	高松市教育委員会学校教育課・課長	市立小学校、研究協議会等　指導	令和４年７月～令和６年３月
岡内　秀寿	高松市教育委員会学校教育課・課長	市立小学校、研究協議会等指導	令和６年４月～令和７年３月
内海　亜也子	高松市教育委員会学校教育課・指導主事	研究・指導	令和４年７月～令和５年３月
安富　慶幸	高松市教育委員会学校教育課・指導主事	研究・指導	令和４年７月～令和５年３月
篠原　明子	高松市教育委員会学校教育課・指導主事	研究・指導	令和５年４月～令和６年３月
宮本　英津子	高松市教育委員会学校教育課・指導主事	研究・指導	令和５年４月～令和６年３月
西島　宏顕	高松市教育委員会学校教育課・指導主事	研究・指導	令和６年４月～令和７年３月
大前　幸子	高松市教育委員会学校教育課・指導主事	研究・指導	令和６年４月～令和７年３月
矢口　多恵	高松市教育委員会学校教育課・指導主事	研究・指導	令和６年４月～令和７年３月
高本　直人	高松市健康福祉局こども保育教育課・課長	公私立保育所・こども園、高松市立幼稚園　連絡調整	令和４年７月～令和６年３月
香川　昭子	高松市健康福祉局こども保育教育課運営支援室・室長	公私立保育所・こども園、高松市立幼稚園　連絡調整	令和６年４月～令和７年３月
久保　優子	高松市健康福祉局こども保育教育課運営支援室・主幹	市立幼稚園・こども園、研究協議会等指導	令和４年７月～令和６年３月
橘　静香	高松市健康福祉局こども保育教育課運営支援室・室長補佐	市立幼稚園・こども園、研究協議会等指導	令和６年４月～令和７年３月
南　真由美	高松市健康福祉局こども保育教育課運営支援室・主幹	市立保育所・こども園、私立保育園、保育研究会等指導	令和４年７月～令和６年３月
坂東　理恵	高松市健康福祉局こども保育教育課運営支援室・主幹	市立保育所・こども園、私立保育園、保育研究会等指導	令和６年４月～令和７年３月
河江　奈緒美	香川県教育委員会義務教育課・主任指導主事	県内公立幼稚園・こども園等　指導	令和４年７月～令和７年３月
福家　理映子	香川県総務学事課・参事	私立幼稚園、研究協議会等　調整	令和４年７月～令和５年３月
山本　麻有里	香川県総務学事課・参事	私立幼稚園、研究協議会等　調整	令和５年４月～令和７年３月

＜会議委員の決定プロセス＞

令和２年度から、高松市教育委員会高松市総合教育センター内に、幼児教育係を設置し、公立就学前施設教職員の研修の一元化を図っている。その中で、これまでも実施してきた「高松っ子いきいきプラン推進協議会」と「幼小連携教育に関する指定研究」の内容を合わせ、「高松市幼保小の架け橋カリキュラム開発会議」とした。

主担当は、幼児教育係が所属する高松市教育員会高松市総合教育センターとし、令和３年度末から関係部局に「幼保小の架け橋プログラム」の趣旨及び国からの支援を受けられるメリット、具体的な研究内容や方法について説明し、会議組織への参加の承諾を得た。

事業２年目より、幼保小の架け橋プログラムの取組を推進するため拡充、増員を行った。

【コーディネーター】１年目・・・・幼児教育関係者
２年目より・・元小学校長を増員　※小学校への支援
【助言者】　１年目・・・・香川大学より２名　３校区を担当
２年目より・・香川大学より３名　４～５校区を担当　※校区の拡充
【開発校区】　２年目より・・牟礼地域の小学校区の私立施設を含む。
２校区から３校区へ拡充
※牟礼地域の就学前施設から３つの小学校へ就学することから、牟礼校区全てで連携・接続を推進
２年目より・・開発校区の委員だけでなく管理職の会議に参加
※学校・園所全体のカリキュラム・マネジメント
【管理職団体】　２年目より・・公立小学校・公立就学前施設管理職の会議への参加
※管理職の理解の推進

３－２．開催実績

＜開催実績＞

令和４年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
【第１回全体会議】 令和４年７月14日 15:00～17:00	・趣旨説明 ・開発会議の年間計画 ・開発校区の取組紹介 ・開発校区の実態に即した取組（校区別協議） ・指導助言	・高松市の連携・接続の課題からテーマを共有し、具体的な方針について共通理解を図った。 ・各開発校区の「共に育てたい子どもの姿」や「連携・接続のステップ」を共有し、交流・連携の年間計画を立てた。
【第２回全体会議】 令和５年２月９日 14:45～16:45	・トークシート等の活用 ・交流活動の有効性 ・実態に即した接続期カリキュラム ・各校区の取組状況と次年度に向けて ・開発会議のもち方、自治体の役割 ・指導助言	・トークシートの活用により具体的な子どもの姿を基にした協議が進むといった有効性が分かった。 ・互恵性のある交流のポイントや架け橋期のカリキュラムの改善方法について共通理解を図った。
【第１回校区別会議】 令和４年８月１日 14:25～16:45	・校区の共に育てたい子どもの姿に向けての取組 ・１年生の事例を基に対話 ・カリキュラム改善 ・指導助言	・「共に育てたい子どもの姿」に向かうためにどのような連携・接続が有効か、１年生の資質・能力について意見を出し合い、架け橋期のカリキュラムの内容を確認した。
【第２回校区別会議】 令和４年10月～11月 15:00～16:30	・互恵性のある交流活動 ・指導助言	・交流前と後の協議により、５歳児と１年生の発達の姿を知り、互いのねらいやめあてを理解した。
【第３回校区別会議】 令和５年１月～２月 15:00～16:30	・５歳児の学びの見取り ・架け橋期の支援や環境 ・１年生スタートカリキュラム改善 ・指導助言	・５歳児の保育参観を通して、具体的な子どもの姿からトークシートを使って学びを見取った。 ・５歳児の支援や環境から１年生スタート期の支援や環境について考えた。

令和５年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
【第１回全体会議】 令和５年５月１日 14:30～16:30	・開発会議の取組状況と今年度の計画 ・１年生スタート期の参観報告 ・今年度の各施設の取組 ・子どもの学びをつなぐスタートカリキュラム ・指導助言	・昨年度からの取組状況と今年度の各校区での取組の重点を共通理解した。 ・１年生スタート期の環境のポイント（安心感・主体性・コミュニケーション）を確認した。 ・校区の自然環境や文化を生かす連携・交流の有用性を確認した。
【第２回全体会議】 令和６年２月20日 14:30～16:30	・開発校区の実践状況と次年度の取組 ・関係機関・自治体の取組 ・次年度の開発会議・推進方法 ・指導助言	・「共に育てたい子どもの姿」「連携・接続の目標」の共通理解の重要性を確認した。 ・「子どもの学びをつなぐ」各シートにより、子どもの学びを見取り授業や保育づくりの改善につながった。 ・昨年度の成果や反省を生かし、今年度の実態を踏まえ改善していくＰＤＣＡサイクルの重要性を確認した。
【第１回校区別会議】 令和５年５月 15:00～16:30	・1 年生スタート期の子どもの姿と支援や環境 ・学びをつなぐスタートカリキュラム ・指導助言	・実際の１年生の授業からスタート期の安心感、主体性につながる環境の工夫と子どもの学びを共通理解した。
【第２回校区別会議】 令和５年８月４日 15:00～16:30	・互恵性のある交流活動 ・指導助言	・昨年度の交流活動の振り返り、交流活動の「ねらい・めあて」を共有し、子ども同士の親しみや主体性を引き出す支援を考え、教職員が協働しながら活動内容を考え準備することを確認した。
【第３回校区別会議】 令和５年10月～11月 15:00～16:30	・交流活動での子どもの学びと支援や環境構成 ・スタート期のカリキュラムの改善と今後のアプローチ期のカリキュラム ・指導助言	・交流を重ねていくことで互いに主体的に関わり表現できる学びにつながることが分かった。 ・５歳児と１年生両方に支援するという教職員の意識が高まった。 ・校区の教職員の参観により、学校・園所全体の取組につながった。
【第４回校区別会議】 令和６年１月～２月 15:00～16:30	・５歳児の遊びの中の学びや支援・環境構成 ・校区の実態に即した学びをつなぐ架け橋期のカリキュラムとスタートカリキュラム ・今年度の取組の評価と次年度への引継ぎ ・指導助言	・就学前の教職員は、子どもが主体的に自己発揮できるように、保育者の構え、意識、立ち位置、子どもへの関わり方などを、カリキュラムに表していく必要がある。 ・スタート期のカリキュラムに記載されていない具体的な子どもの姿や実践を写真や簡単なエピソードなどで表わすなど、次年度の取組につながる工夫について検討する必要がある。

令和６年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
【第１回全体会議】 令和６年５月１日 14:30～16:30	・開発会議の取組状況と今年度の計画 ・１年生スタート期の取組紹介 ・校区・関係機関等協議今年度の取組と推進方法 ・協議内容等情報共有 ・指導助言	・各校区の取組を接続期のカリキュラムにどのように反映させてきたかを共有し今年度の取組の参考にした。 ・開発校区の取組等の情報発信として、合同研修会や実践事例資料の発行、取組の要件や方法をまとめた冊子の作成を進める。 ・関係部局や団体からも発信する。 ・各校区の取組を引き継いだり、協議を深めたりする工夫が必要である。
【第２回全体会議】 令和７年２月20日 14:30～16:30	・３年間の自治体の取組発表 ・開発校区の取組の成果と今後に向けて ・全校区への推進方法 ・指導助言	・気軽に対話できる関係が基盤であることが分かった。 ・管理職の意識が重要である。 ・架け橋の取組が、保育・教育実践を振り返る力になり、子どもを変えることにつながった。 ・教師や保育者として成長したという手応えをもてた。 ・持続可能にしていくために、小学校１年生の授業づくりがポイントで、就学前の教職員の情報が必要である。１年生から６年生まで学びがつながることを意識する。 ・異動のない私立園の果たす役割は大きい。 ・縦（時間）と横（空間）のつながりの中で、子どもたちをどう育てていくのか考えるプログラムである。 ・地域や家庭との連携が課題である。
【第１回校区別会議】 令和６年５月 15:00～16:30	・1　年生スタート期の子どもの姿と支援や環境 ・学びをつなぐスタートカリキュラム ・令和６年度架け橋期のカリキュラムの内容 ・指導助言	・見通しをもって生活することは、その先に「自分で考えて動く」ことがあり、その土台に安心感がある。 ・立ったり座ったり、移動したりなど、スタート期は自由度が高い方が楽しく勉強できる。 ・子どもたちの「やりたい」の実現のために、大人側はできる援助を考えていくことが信頼感、主体性につながる。
【第２回校区別会議】 令和６年７月30日 15:00～16:30	・校区の架け橋期のカリキュラムの改善の過程やポイント ・交流活動計画 ・管理職協議 連携・接続に向けての体制づくり ・指導助言	・学びや生活がどのようにつながっていくのかが分かるレイアウト、記載内容、添付資料の工夫や毎年度の子どもの姿から見直すことを共通理解した。 ・施設の全職員が理解する体制づくり、引継ぎや記録の工夫、保護者・地域への周知や連携について具体的な実践交流から各校区の実践に生かした。
【第３回校区別会議】 令和６年10月～11月	・交流活動での学び、支援・環境等	・架け橋プログラムは、架け橋期の子どもの個々をフォーカスすることである。

15:00～16:30	・架け橋期のカリキュラムとの関連 ・指導助言	・毎年度、その時期の交流内容を子どもたちの親密性に合わせて考えていく必要がある。 ・夢中になって取り組んだ結果、関係がより深まるような教材や題材、活動を考えていく必要がある。 ・子どもの話で終わるのではなく、その時の環境や教職員の関わりが一緒に出てくる話合いになってきた。 ・どの教職員も自分事として役割があり子ども達に関わるようになった。
【第４回校区別会議】 令和７年１月～２月 15:00～16:30	・５歳児の学びや支援・環境構成 ・５歳児の学びをつなぐスタートカリキュラム ・校区の実態に即した架け橋期のカリキュラムの改善 ・今年度の取組の成果と次年度への引継ぎ ・指導助言	・子どものよさとか自分らしさを見付けるような見守り方や待ち方があり、それから、子ども自身が前向きに活動することができる関わり方や声掛けができる。 ・一人一人に目を向けて、その子どもの後につながる学びのスイッチを、どの程度幼児期の段階で見付けて、小学校につなげるかが重要である。 ・カリキュラムの元々の意味は、「行路」「走ってきた道」。その日の重点を振り返って、次の年の重点と、内容のアレンジにつながっていくようになればよい。 ・カリキュラムとして、まずは、書き出し全て見えるようになってから大事な視点に絞ることが必要である。

３－３．成果と課題

＜架け橋期のカリキュラムに関する議論＞

【本市の架け橋期のカリキュラムに関する方針】

①５歳児と１年生の学びを教職員が理解し、その学びをつなぎ伸長していくため、気軽に対話できる教職員関係を構築する。

②架け橋期のカリキュラムを作って終わりではなく、子どもの姿を中心に対話し、共有した子どもの学びや支援、環境などを校区のカリキュラムとして反映させていく。

③校区の架け橋期のカリキュラムは、地域の子どもの学びをつなぐカリキュラムであり、学校・園所が協働して作成していくことを管理職が理解し、管理職のリーダーシップのもと、学校・園所のカリキュラム・マネジメントとして取り組む。

④学校・園所全体の取組となるように、「地域の子どもを共に育てよう」という意識を醸成する。

⑤地域の自然や文化、施設等を、校区で共有できる教材として取組に生かす。

⑥市内全ての子どもたちの学びを保障するために、子どもに関わる開発校区や関係部局等の関係者が架け橋プログラムの推進方法を考え発信する。

【校区別会議等での意見】

①取り組んでみて、子どもの姿が教えてくれた事を基に校区の教職員でカリキュラムに落とし込んでいくことが大切である。

②行事や活動のみで、子どもの経験や学びが記載されていないと学びのつながりが分からない。

③「高松っ子の視点」を全て網羅しようとすると、文字数や内容が多く分かりにくくなる。校区の共に育てたい子どもの姿に関連する視点に絞って記載するのはどうか。

④連携校区に複数の就学前施設がある場合、就学前施設間で、５歳児の遊びや生活の姿や大事にしたい学びについて共有することが必要である。

⑤校区の子どもを共に育てようという意識の醸成を基に、「共に育てたい子どもの姿」を共通の目的として取り組むために、どのような力を付けていくのかを伝え合い、学びのつながりについて就学前施設と小学校の教職員が共に理解し合えるような標記やレイアウトが必要である。

⑥連携校区の施設数や環境等、校区の特性を生かし、工夫しながら連携していることや、学校・園所のカリキュラム・マネジメントとして取り組んでいることなど、全教職員が理解できるようなカリキュラムや引継ぎが必要である。

⑦交流活動の充実や改善のために次年度にも参考になるよう、各校園で、写真入りの記録を作成し、カリキュラムの補助資料とすることとした。

【指導助言】

①カリキュラムを作らなければいけないということになると、きっちりした完成形にして提示するという形になりがちで、完成してしまうと、そうあるものとして使われてしまう。毎年恒例でこれをやるという形ではなく、余白部分をつくり、その年の子どもたちの様子を観て、その時の担任のアイデアを出しながら記入していくのはどうか。

②連携と接続について意味がわからない、ということもあるが、話しながら分かってくるのだと思う。子どもの連携もそうだが、大人も馴染むことが大事で、気軽に会って話すことを大事にするなど、大人も馴染める機会をどうつくるかがポイント。時間の制約もあるけれど、工夫することで、それぞれの校区の課題も一歩ずつ前に進んでいくことにつながるだろう。

③現在、学校全体でスタートカリキュラムに取り組むことは当たり前になってきており、「カリキュラムの実践を通して、教員も子どもたちも学校全体に学びがある」とう意識へと変化している。学

校全体で１年生を迎え、幼児期の学びを小学校へとつなげていく取組が、「チーム学校」となっていく原動力になる。１年生の入学は、「学校全体で」ということを生み出す、学校にとって大変重要なことである。

④園所の先生方からも、「３、４、５歳の発達について考えたい」、「全教職員の学びにつながる話し合いの時間をもつようにした」など「架け橋カリキュラムは５歳の先生だけの仕事ではない」という話があった。これまで幼小の連携・接続は、１年担任と５歳担任が一生懸命やらなければならないものだったが、学校・園所全体の取組にしていくことで、それぞれの学校経営や園所経営がうまくいく一つの契機となっているのが重要なことだと思う。

⑤カリキュラムがあることで人が替わっても持続可能な実践が続けられる一方で、カリキュラムにとらわれてしまう可能性もある。対話のできる人間関係が築かれてきた最終年度、カリキュラムをきちんとしたものに整えなければならないではなく、「本当にこれでいいのか」「自分たちがやってきたことはこの言葉で表せているか」など、大胆に考えながら実践して欲しい。カリキュラムの中には書ききれない詳細部分、例えば具体的なエピソードやうまくいかなったことなど、たくさんの財産が各校区にはある。それらが添付書類として整理されていると、次年度の先生が実践につなぎやすいと思う。

⑥次年度、この会議に参加するメンバーは、現メンバーの半数程度になり、新しいメンバーも加わるだろう。代わる人がどうするかが大事。同時に、残った人がどうするかも大事だと思う。代わらない人ということで、私立施設の役割も重要。他に代わらない人は誰かと考えると、校区の地域の人や保護者になるだろう。保護者の方は、１５年～２０年近くその地域で保護者として生きている。そういう保護者や地域を巻き込んでいくことが大事だと思う。学校園所からの情報発信の受け手としてだけでなく、保護者や地域の力をどのように生かしていくのかを考えていきたい。この人たちを巻き込める取組になれば、子育ても含めて充実した連携ができていくのではないかと思う。

⑦カリキュラムに関しては、２年間の取組が基盤になり、各校区で、大事にしたい部分が固まってきているのではないかと思う。目新しいことをやればいいという話ではなく、しっかりした土台という意味での不易の部分、年ごとに子どもを観ながら実態に合わせて積極的に変えていく流行の部分を考える必要があると思っている。それらを、カリキュラムにどう反映させるか検討しながら、最後のまとめに進んでいければいい。

⑧高松市全体として、多様な就学前施設から子どもが来る大規模校であるとか、一人二人は他の学区から入ってくることが多いとか、いろんなタイプの学校がある中で、どんな形で架け橋のプログラムができることが「一人一人の多様性の尊重」や「学びや生活の基盤をつくる」という点にどうつながっていくのか整理できたらいい。

⑨実施に向けての手引きに「５歳児から小学校１年生までの２年間を架け橋期とする」記されている。しかし、２年間だけを考えるわけではなく、就学前の０歳から６歳までの６年間、小学校１年生から６年生までの６年間、中学校も高等学校も含めると０歳から１８歳までの長いスパンの子どもを、校区でどのように育てていくのか考えることだと思う。この長い期間に加えて、校区の中の園・所・学校で育つ子どもたちには家庭や地域があり、家庭での子育てや家庭教育も、地域の教育も含まれる。つまり、縦（時間）と横（空間）のつながりの中で、子どもたちをどう育てていくのか考えるプログラムである。

＜会議設置による成果と課題＞

１．全体会議の成果（〇）・課題（△）・対策（※）

〇高松市のこれまでの連携・接続に関する取組や課題、これからの学びをつなぐ連携・接続の在り方について、**関係部局や団体と共有**することができた。
〇関係部局や団体間での情報交換の場を設け**連携・接続の取組の推進方法を共に考え**、実施できるよう連携を図ることができた。
〇各開発校区の**実践を交流し、取組の参考**となった。

△初年度、関係者の参加依頼の際に、事業の趣旨が伝わりにくかった。
※全体会議の場で、連携・接続の趣旨について、これまでの小学校への順応ではなく、子どもの学びをつなぐ視点でのカリキュラム改善ということを繰り返し伝えたり、指導者からの助言をいただいたりした。
※開発校区毎の校区別会議への参加を呼び掛け、実際の子どもの姿や教職員の関わり、協議を通して、事業内容を理解していただいた。

２．校区別会議の成果

〇就学前施設と小学校の参観を通して、互いの**子どもの実態を知る**ことができた。
〇**校区や地域の実態**が分かり、校区の実態に即したカリキュラム開発として大変重要であることが分かった。
〇校区の連携・接続に関するステップの**目標を共有**できた。
〇校区の教職員、管理職が**気軽に参加しやすく、多面的に子どもを理解**することができる場となってきた。
〇校区別会議を重ねることで、**気軽に対話できる関係**が築け、「共に育てたい子どもの姿」をめざした**連携を進めていこうとする意識**が高まった。
〇管理職等の参加が増え、**持続可能な連携・接続に向けた体制づくり**が進んできた。
〇**管理職間の連携**（校区内会議・保幼間会議等）が進んできた。
〇他の開発校区での取組を参考にし、**主体的な取組**につながった。

△複数の開発校区とコーディネーター、指導者のスケジュール調整が難しい。
※年度末に、開発校区で次年度の連携・交流等の年間計画を立て、コーディネーターや指導者にも次年度の予定を伝え、早めに調整した。

△複数の開発校区の連携・接続のフェーズやその年度の実情に合わせてコーディネートをする必要がある。
※事務局で校区の担当者を決め、校区に連絡したり尋ねたりして、連携状況を確認し継続して記録を取る。問題点等があれば早期に対応し、サポートを行う。

△担任任せでなく、学校・園所全体の取組となるような仕組みを作る必要がある。
※校区の管理職と教職員が共に考え確認し、共通理解を図りながらスモールステップで取り組めるように、メールや電話等でこまめに情報共有を行った。

４．架け橋期のカリキュラム

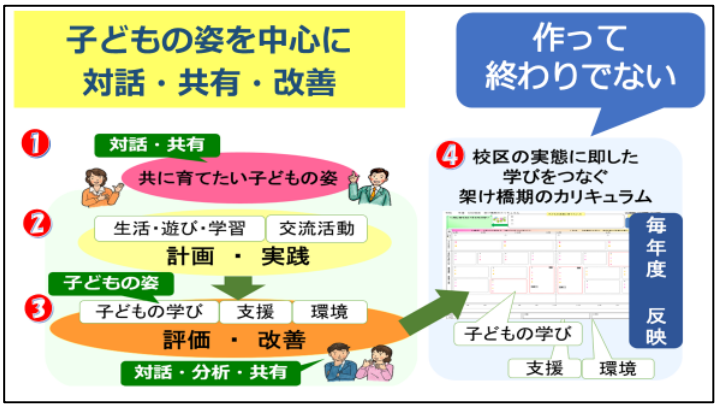
４－１．開発プロセス

１．取組体制

【事務局】　高松市教育委員会 高松市総合教育センター

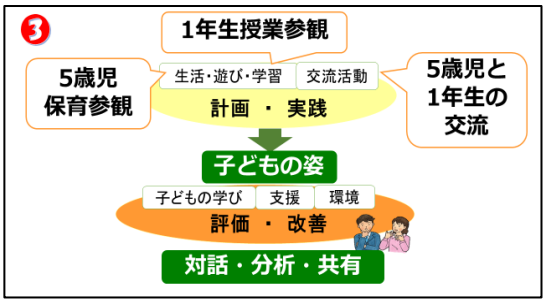
【開発会議】　各開発校区、架け橋コーディネーター、有識者、関係部局、管理職団体代表者等が参集し、カリキュラム開発会議全体会議を年２回、校区別会議を年４回実施。

２．校区の子どもの実態に即した学びをつなぐカリキュラムへの過程



①年度当初に、校区の教職員間で学校、園所の具体的な子どもの実態や目標を伝え合いながら、校区の「共に育てたい子どもの姿」を共有する。

※「共に育てたい子どもの姿」を共有することは、幼児期から児童期への発達や学びのつながりを意識するきっかけとなり、教職員同士が、同じ目標に向かって協働しながら取り組むための大変重要なポイントとなる。



②「共に育てたい子どもの姿」に向かって各学校・園所の指導計画を基に取り組む。

③相互参観や交流活動を実施し、子どもの姿をもとに、子どもの学びや教職員の支援、環境について分析・共有する協議を行う。

④共有した子どもの学びや支援・環境を教職員が協働しながら架け橋期のカリキュラムへ反映させる。

このような過程を経ることで

＊「作って終わり」ではなく、校区の実態に即した子どもの学びをつなぐカリキュラムとなる。

＊教職員が、子どもの発達や学び、互いの教育・保育内容を知り、理解を深められる。

＊相互理解が深まることで、学びの連続性を踏まえた質の高い授業・保育づくりにもつながる。

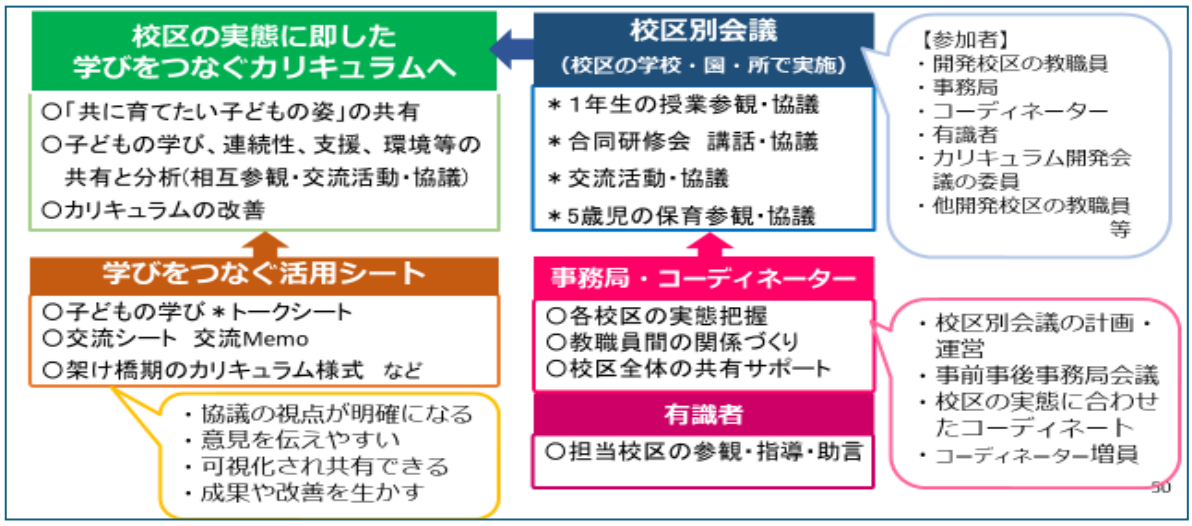
３．架け橋期のカリキュラムの改善を図る状況づくり～校区別会議の実施～

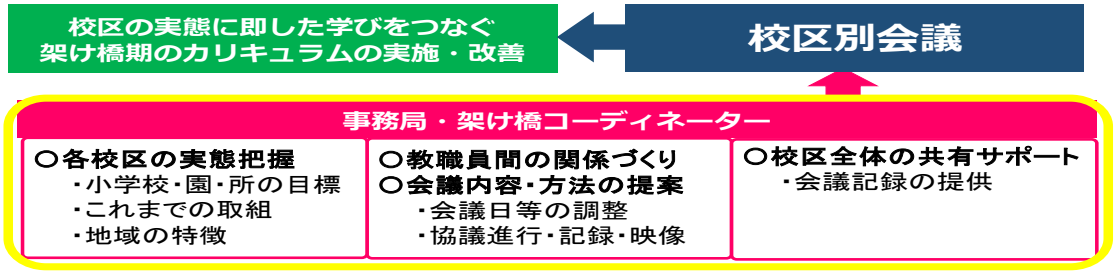
カリキュラムの改善を図っていくために、「保こ幼・小合同研修会」を実施し、開発校区においては、この研修を含む年間４回の校区別会議を実施している。

参加者を開発会議関係者の他にも開発校区以外の希望する教職員等、少しずつ広げていった。

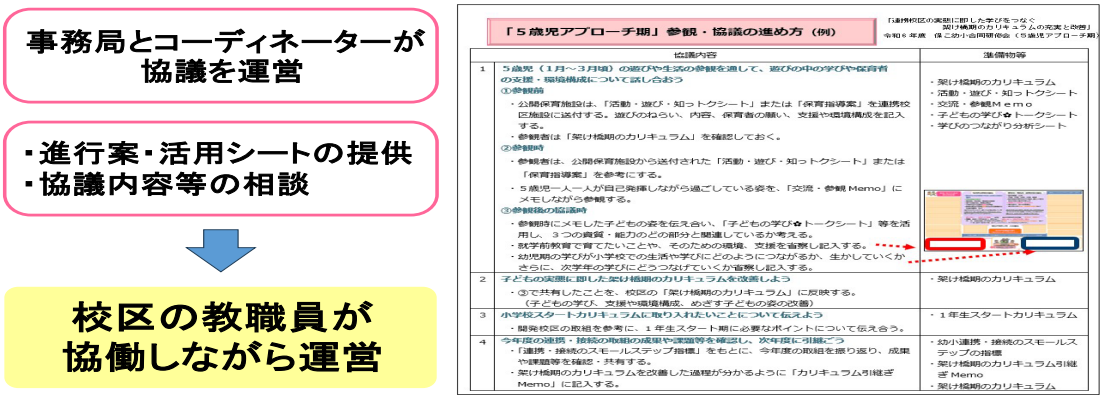
(1) 校区の実態に即したコーディネート

会議を開催するにあたり、まずは、校区の教職員が気軽に対話し連携できる状況がつくれるよう、事務局とコーディネーターが、各校区の実態を把握し、校区の連携・接続の状況に応じたコーディネート案を立てている。そして、安心して意見を出し合い、協議が深まるよう、協議方法や進行について検討し、会議を進めてきた。撮影した映像や、板書等で協議内容を可視化し共有できるようにした。



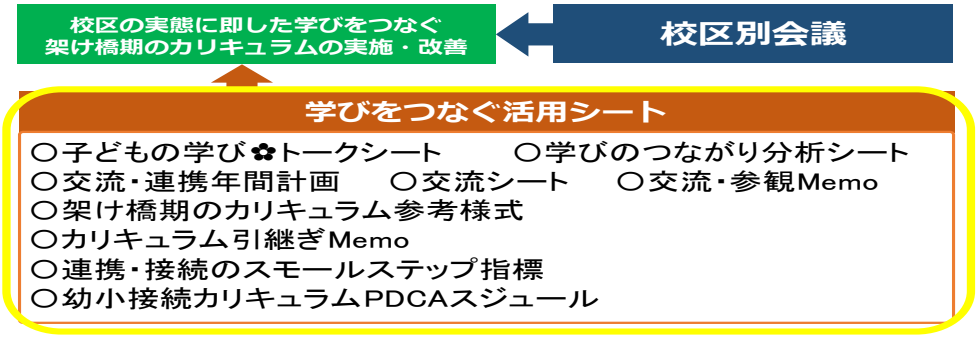


校区別会議２年目後半からは、少しずつ、校区の教職員が協働しながら運営できるように、進行案や活用シート等を提供し、必要に応じてサポートを行うようにした。



(2) 学びをつなぐ各シートの活用

校区別会議では、本市で開発した子どもの学びをつなぐ各シートを活用した。



第１回の会議では、校区で「共に育てたい子どもの姿」や、連携・接続の目標を共有し、交流・連携の年間計画をたてている。

第１回校区別会議

①１年生の授業参観・協議
（4～5月）

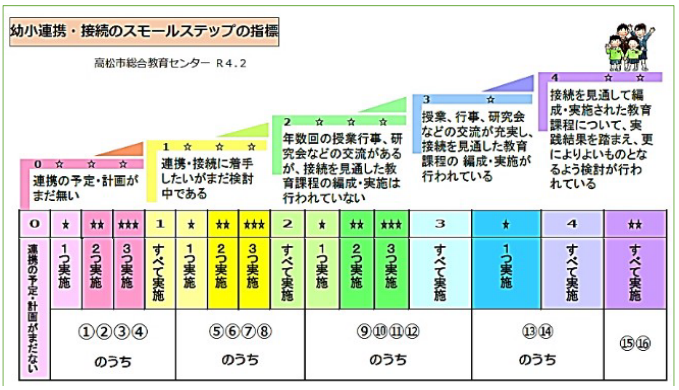
校区の実態に即した学びをつなぐ架け橋期のカリキュラムの実施・改善

○「共に育てたい子どもの姿」の共有
※連携・接続の目標　※年間計画

学びをつなぐ活用シート

○交流・連携年間計画
○連携・接続のスモールステップ指標

連携・接続のスモールステップ指標



交流・連携年間計画

また、１年生の授業参観を行い、参観後、１年生の姿を中心に対話し、分析・共有したことをカリキュラムに反映させたり、授業・保育の改善につなげたりしている。

第１回 校区別会議

①１年生の授業参観・協議
（4～5月）

校区の実態に即した学びをつなぐ架け橋期のカリキュラムの実施・改善

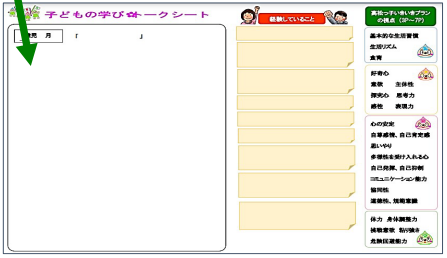
○子どもの学び、連続性、支援、環境等の共有と分析
○架け橋期のカリキュラム等の改善
※授業・保育改善へ

学びをつなぐ活用シート

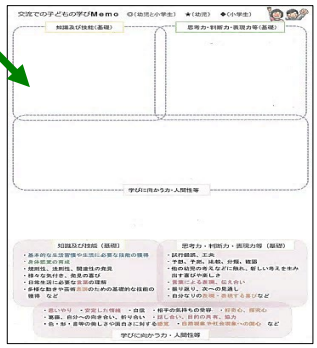
○子どもの学び✿トークシート
○交流・参観Memo
○学びのつながり分析シート
○架け橋期のカリキュラム参考様式

子どもの姿を記入しながら参観

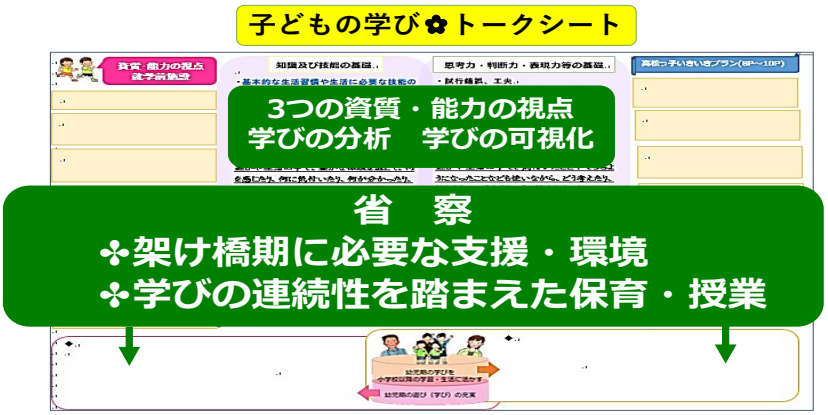
子どもの学び✿トークシート



交流・参観Memo

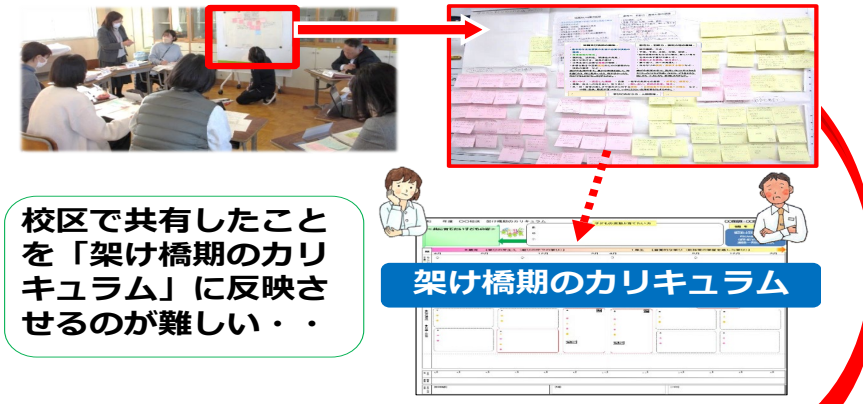


参観の際には、「子どもの学びトークシート」等に子どもの姿等を記入し、参観後に、具体的な子どもの姿を伝え合い、一つのシートに付箋を貼ったり書き込んだりしながら、３つの資質・能力を視点で子どもの学びを分析し、可視化していく。



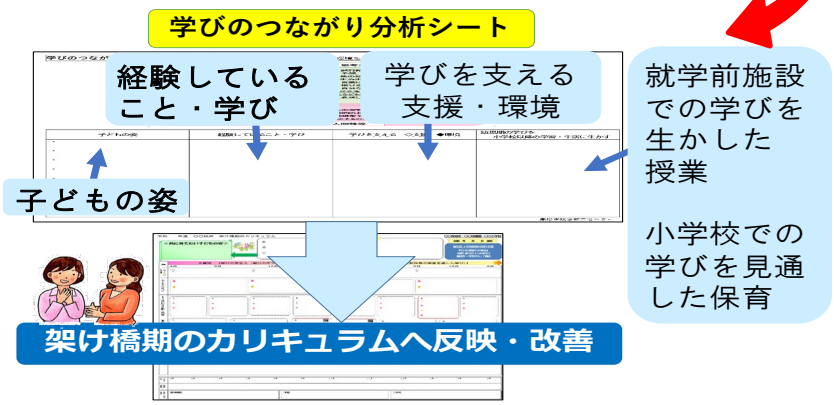
そして、架け橋期に必要な支援や環境、「学びの連続性」を踏まえた保育・授業について省察し記入する。

協議内容を一つのシートに可視化することで協議に参加できなかった教職員もこのシートを基に共有することができる。



協議を進めていく中で、共有したことを「校区のカリキュラム」に反映させるのが難しいという課題があがってきた。

そこで、子どもの学び、教職員の支援や環境の構成等、共有したことや学びのつながりが整理できる「学びのつながり分析シート」を開発した。



「学びのつながり分析シート」に記入した内容をカリキュラムと照らし合わせていくことで、カリキュラムの改善がしやすくなってきた。

第２回の会議は、市内全体の合同研修会と同日に全校区をオンラインでつなぎ、講話や実践発表、交流活動の計画等を行っている。

第２回 校区別会議

②合同研修会　講話・協議
（8月ごろ）

校区の実態に即した学びをつなぐ架け橋期のカリキュラムの実施・改善

※幼小連携教育に関する講話
　実践発表
※交流活動の計画

学びをつなぐ活用シート

〇交流・連携年間計画
〇交流シート
〇交流・参観Memo

交流前協議・準備

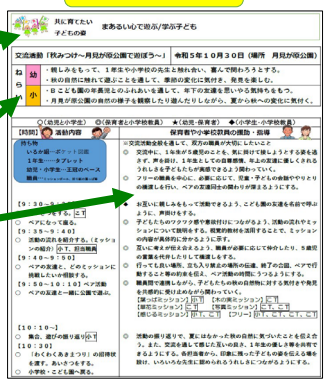
「共に育てたい子どもの姿」

交流活動・単元等の目標やねらい

具体的な支援、環境、役割分担等

協働して計画・共有

交流シート



イベント的な交流ではなく、子どもの意識や単元の流れ等を踏まえ、幼児も小学生も主体的に取り組める、互恵性のある交流となるように、交流前の協議の場を大切にし、交流シートを活用し、協働して計画していった。

第３回の会議では、計画した交流活動の実施、協議を行っている。交流メモを活用して協議し、共有した内容や課題、改善策等をその後の遊びや学習、次回の交流に生かしている。

さらに、架け橋期のカリキュラムにも反映させている。

第３回 校区別会議

③交流活動・協議
（10～11月ごろ）

校区の実態に即した学びをつなぐ 架け橋期のカリキュラムの実施・改善

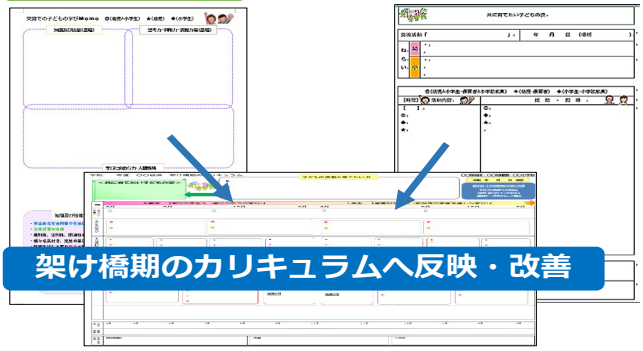
○子どもの学び、連続性、支援、環境等の共有と分析
○架け橋期のカリキュラム等の改善

学びをつなぐ活用シート

○交流・連携年間計画
○交流シート
○交流・参観Memo
○架け橋期のカリキュラム参考様式

交流・参観Memo

交流シート



架け橋期のカリキュラムへ反映・改善

(3) 実践・対話・共有・分析したことを架け橋期のカリキュラムへ反映

第４回の会議では、５歳児の保育参観と協議を行っている。各シートを活用して協議し、「架け橋期のカリキュラム」へ反映させると同時に、スタートカリキュラムの改善も行っている。

第４回 校区別会議

④5歳児の保育参観・協議
（1～3月）

校区の実態に即した学びをつなぐ 架け橋期のカリキュラムの実施・改善

○子どもの学び、連続性、支援、環境等の共有と分析
○架け橋期のカリキュラム等の改善
※授業・保育・スタートカリキュラムの改善

学びをつなぐ活用シート

○子どもの学び✿トークシート
○交流・参観Memo
○学びのつながり分析シート
○架け橋期のカリキュラム参考様式

(4) 成果や課題、次年度の目標等をカリキュラムと共に引き継ぐ

今年度の成果や課題、次年度の目標等をカリキュラムと共に引き継げるようにするため、改善の経緯や次年度の目標などが記入できる「架け橋期のカリキュラム引継ぎ Memo」を開発し、このシートを使って、引き継げるようにした。

各会議で協議した内容を、その都度シートにメモをしていくことで、年度末の振り返りに要する時間も短縮される。

第４回 校区別会議

④5歳児の保育参観・協議（1～3月）

校区の実態に即した学びをつなぐ 架け橋期のカリキュラムの実施・改善

※今年度の連携・接続の成果・課題、次年度の目標等の協議
※次年度への引継ぎ

学びをつなぐ活用シート

〇交流・連携年間計画
〇架け橋期のカリキュラム参考様式
〇カリキュラム引継ぎMemo
〇連携・接続のスモールステップ指標

校区の架け橋期のカリキュラム引継ぎ Memo

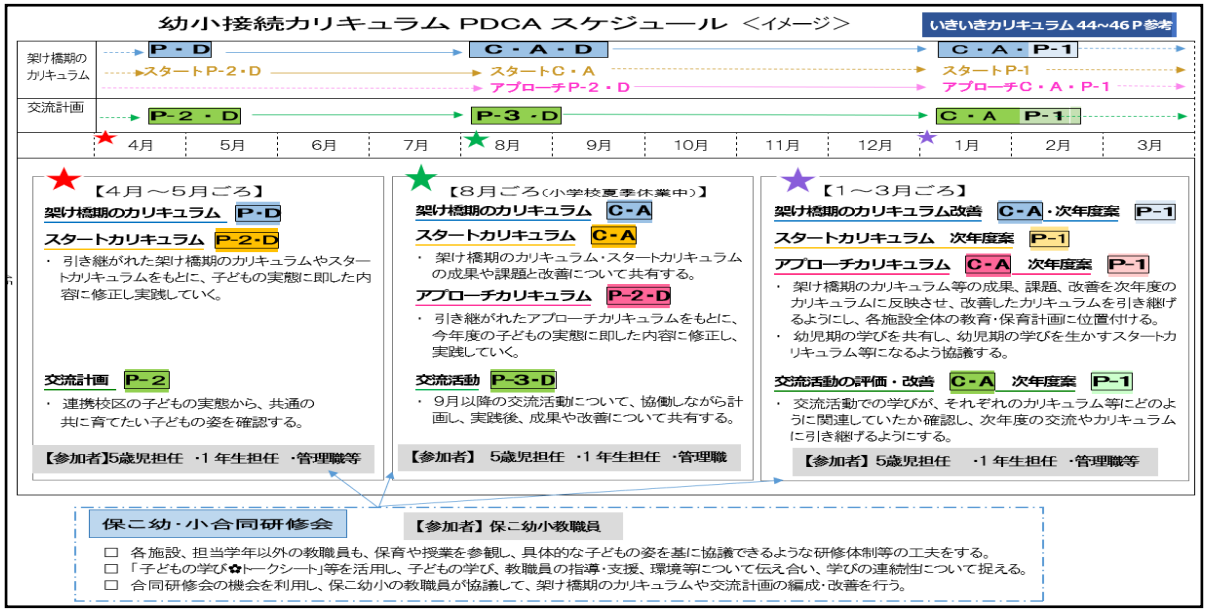
◇カリキュラム改善の経緯
◇今年度の成果・課題、次年度の目標
◇具体的な実践資料の添付　等
✤その都度記入する

(5) 個人に依存しない持続可能な学校・園・所の体制づくり

年度が替わり、担当が替わっても、前年度の取組が引き継がれ、校区の教職員が見通しを持ちながら、協働して取り組めるように、そして、架け橋期のカリキュラムを改善する体制が、学校・園・所全体のカリキュラム・マネジメントとして位置付けられるように、またそれが持続可能なものとなるような仕組みづくりとして、「幼小接続カリキュラムＰＤＣＡスケジュール」に添って、市主催の合同研修会を年間３回実施した。校区別会議もこのスケジュールを基に実施してきた。

担当教職員だけでは、学校・園所全体で取り組む体制が作りにくいという課題があり、管理職の開発会議への参加を呼び掛け、本事業の趣旨を理解していただくとともに、管理職間の連携を推進し、学校・園所全体のカリキュラム・マネジメントとして取り組めるような体制をつくった。

【架け橋期のカリキュラムＰＤＣＡスケジュール】



４－２．架け橋期のカリキュラムの概要

開発校区では、「子どもの学びの連続性」や「生活科を中心とした架け橋期のポイント」等に着目しながら改善が図られてきた。

（別紙：各校区の架け橋期のカリキュラム・カリキュラム引継ぎ Memo 参照）

【Ａ校区】

・**子どもの言葉**を入れて、子どもの心情や姿を共有できるようにした。
・**複数の小学校就学前施設間**で、子どもにとってふさわしい経験について**共通理解**したうえでカリキュラムに反映させた。等

【Ｂ校区】

・交流活動と日々の教育・保育との関連性が分かるようなレイアウトを工夫し、**校区独自の欄**を設けた。
・**０歳～１５歳までの学び**を考えたカリキュラムへ改善していく。等

【Ｃ校区】

・見直しのポイントを持ち寄り、なるべく大勢の**教職員が顔を合わせて話し合い**ながら共有していくことを大切にした。
・見直す際の**根拠となる事例**を添付する。等

【Ｄ校区】

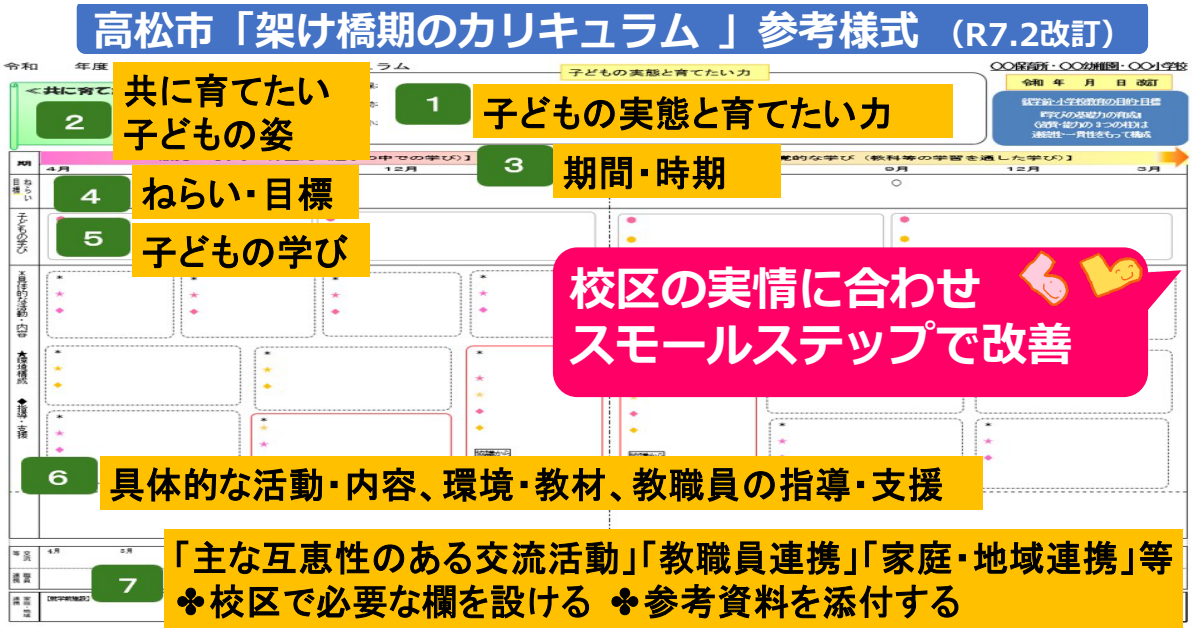
・共に育てたい子どもの姿を**具体的に伝え合い共有**した。
・架け橋期の学びをつなぐためにカリキュラムの**期間を２年間**に延ばした。　等

【Ｅ校区】

・交流や行事、遊びや生活科等の内容について、**学びの連続性を意識**して見直した。
・次年度の担任にとっても分かりやすく**活用できるカリキュラム**へ改善していく。　等

これらの開発校区の取組を基に、本市の架け橋期のカリキュラムの参考様式を改訂した。
各校区の実情に合わせながら、スモールステップで改善できるように推進していく。

（冊子「高松っ子の学びをつなぐ Step Guide Book」「子どもの学びをつなぐ」参照）



高松市架け橋期のカリキュラム　編成・改善のポイント

本様式の枠や色付け等は一例です。校区の子どもの学びを中心に、校区で必要な内容を反映させながら、枠囲みや色付け、項目の加減、レイアウト等を工夫し、活用しやすい架け橋期のカリキュラムを編成・改善してください。

❶ 子どもの実態と育てたい力

◇校区の子どもの実態や、各施設の教育・保育目標等を共有する。

❷ 共に育てたい子どもの姿

◇子どもの実態を踏まえ、校区の子どもたちに育みたい力を共有する。

❸ 期間・時期

◇5歳児から1年生の学びの連続性を踏まえたカリキュラムとなるように、5歳児4月から1年生3月までの２年間を位置付ける。但し、校区の連携・接続の状況を踏まえ、期間を設定する。

❹ ねらい・目標

◇「共に育てたい子どもの姿」に関連するねらい、目標を設定する。
- ５歳児、１年生それぞれ、２期～３期に分ける等、指導計画等と関連させる。

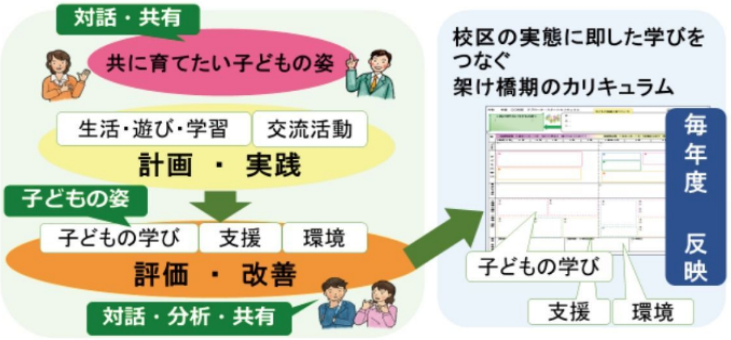
❺ 子どもの学び

◇「ねらい、目標」と関連する「子どもの学び（資質・能力）」を設定する。
- 各施設の指導計画や「高松っ子いきいきプランの視点」※1等を参考
- 子どもの姿から見取った「子どもの学び」を反映
- ５歳児の４月から１年生３月までの学びの連続性が分かる工夫

※1 高松っ子いきいきプラン等
高松市総合教育センター
Webページ

❻ 具体的な活動・内容、環境・教材、教職員の指導・支援

◇「子どもの学び」と関連する活動等を提示する。
- 「子どもの学び」との関連が分かるような（記号、色等）工夫
- 実践後の協議内容（子どもの学びの見取り、学びを支える環境や支援）等を反映
- 相互参観等で共有した内容や子どもの意見を記入できる空欄等の工夫
- 活動等に関する資料、記録写真等の添付



❼ 「主な互恵性のある交流活動」「教職員連携」「家庭・地域連携」等、校区で必要な欄

◇交流活動が「子どもの学び」と関連するように提示する。
- 具体的な計画や記録の添付

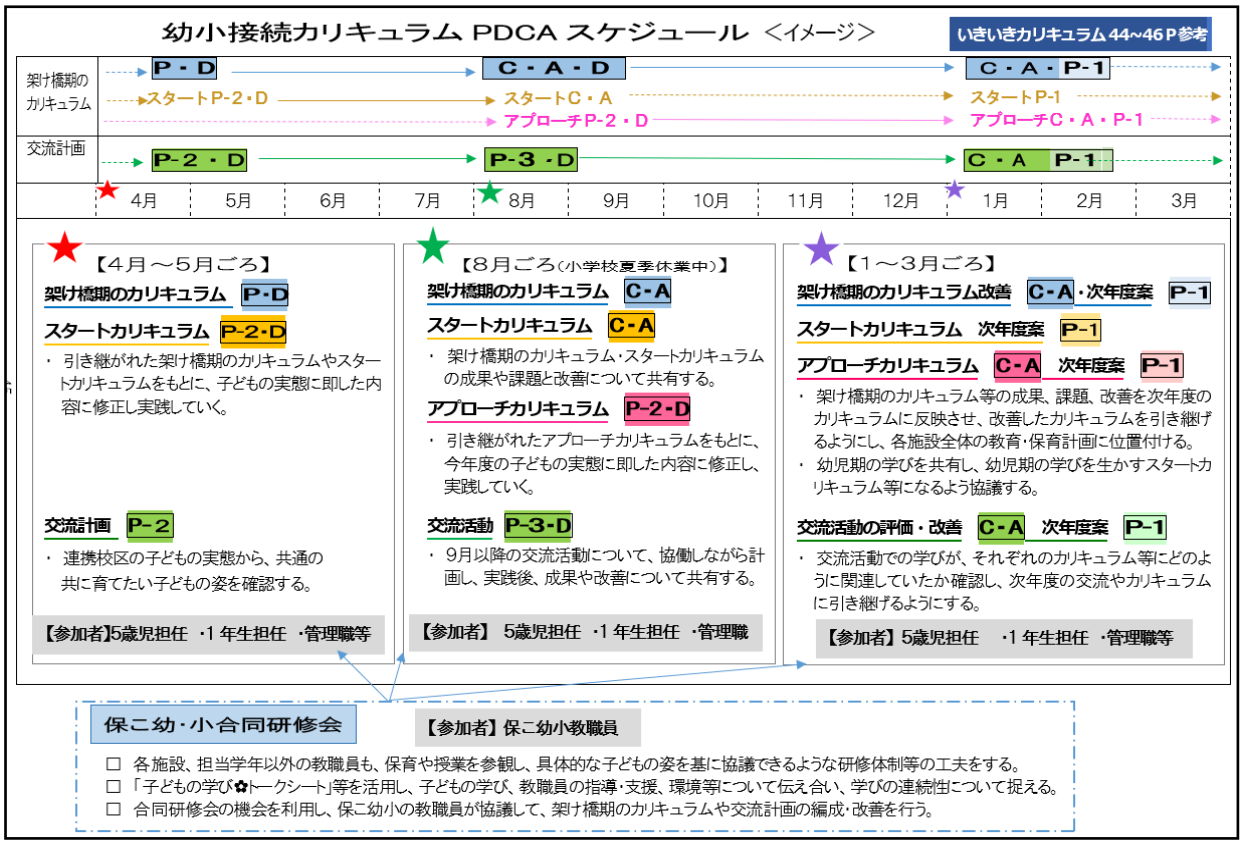
◇教職員同士の連携内容を効果的に位置付ける。

◇子どもの学びを保護者や地域に発信し、子どもに関わる大人や関係機関等が、「共に地域の子どもを育てよう」という意識を醸成するとともに、協働体制づくりにつながる取組などを位置付ける。
- 具体的な資料等の添付

◇校区に必要な欄を設ける。

４－３．架け橋期のカリキュラムの実践

幼小接続カリキュラムＰＤＣＡスケジュールを基に、合同研修会を利用しながらカリキュラムの改善を行った。



【各開発校区での改善の過程】　　（別紙：各校区の「カリキュラム引継ぎ Memo」）

Ａ校区

・地域の子どもを共に育てようという意識が、教職員にも広がってきた。
・形だけのカリキュラムではなく、目の前の子どもの実態に合わせたカリキュラムを作る。
・誰が見てもわかるようなカリキュラムの工夫を探っていく。
・幼保小合同の欄がとても生きている。
・交流活動の充実や改善のために次年度にも参考になるよう、各校園で、写真入りの記録を作成し、カリキュラムの補助資料とすることとした。
・空白部分を作り、子どもの声を聴き、「子どもの思い」を２月頃記入した。子どもの思いを書くスペースは、どの時期の子どもの思いなのか。誰が見ても分かりやすいよう、場所や記載方法の工夫をする。カリキュラムに子どもの言葉を入れることで、子どもの言葉を聴くことに努めている。活動中だけでなく、交流前後の言葉や気持ちも含める。

Ｂ校区

・こ・小・中で地域の子どもたちを育てていく意識を高め、０歳児から１５歳までの保育・教育を進めていく。
・就学前（アプローチ期）の記入は、こども園の教育課程と関連付ける方法もあるのではないか。（特に、子どもの学び、ねらい等の部分）全てを文章で書き表すのは文字数が多くなるので、タイトルやキーワードを記入し、交流 Memo 等を添付する。
・架け橋期のカリキュラムを、３つの資質・能力で見直していくのはどうか。こども園は資質能力では書き表すことが難しい。カリキュラムは２年間にした方がいいのか。実践しながら現在

のカリキュラムを検討し、次年度に向けて改善する部分を考えていくとよいのではないか。
・夏頃、こ小中の現教主任が子どもの実態と育てたい力について話し合い共通理解を図っているので、これらのことをカリキュラムに入れていくのはどうか。

Ｃ校区
・育てたい子ども像について「主体的」から「前向き」に変更した。ポジティブ思考が働く子どもの姿を表すキーワードとして用い、「前向きさ」に焦点を当てて具体的な子どもの姿を見取ろうと考えた。子どもの持ち味・よさをどんどん伸ばすことを大切にし、自分のよさを自覚したり友達のよさを認めたりする子どもを育てたい。３年間の取組で「安定した気持ち」はずいぶん育った。「よさや自分らしさを発揮しながら前向きに活動したり人と関わったりすることができる子ども」としたい。
・子どもの学びの欄には、子どもたちの様子を見て、具体的な文言で示すようにする。
・具体的な活動の欄には、活動を羅列していたので、子どもの学びと活動を関連付けられていることが分かりやすいように表記した。生活全般のつながりを意識するため休み時間の姿を記入した。
・環境の構成・支援の欄には、教員の声掛けから、「子どもの気付きに共感したり考えを取り入れたり、子どもの姿を肯定的にとらえ～」を１年生の欄に追加した。
・地域・家庭連携の欄には、地域の特性を生かした「ふるさと祭り」を入れる。

Ｄ校区
・子どもの主体性を大事にしていくことを共通理解し、学校の規律に当てはめていくのではなく、自由度を大切にしながら子どもとともにルール作りをしていた。このようなことが、架け橋期のカリキュラムやスタートカリキュラムに反映できるとよい。
・牟礼校区の架け橋期のカリキュラムを旧様式から新様式に変更し、カリキュラムのスパンを２年間に広げることにした。
・1 年生４月～３月の活動、支援・環境欄を前期、後期に分けて記入。交流活動が分かるようにマークを付ける。５歳児は、「た・か・ま・つ」全ての視点が網羅するように記載していたのを、校区のめざす子どもの姿に合わせて「か・ま」に絞って記載する。年間を通して交流活動が分かるように記載する。写真やエピソードなども加えると分かりやすいのではないか。

Ｅ校区
・具体的な子どもの姿など、架け橋のカリキュラムの見直しの視点について話し合った。
・１年生の欄を 11 月まで広げ、幼児期の学びを生かせるように、じっくり取り組む。
・校区別会議の度に見直しが必要であることを共通理解した。
・ゆくゆくは５歳児４月から１年生３月までの２年間のカリキュラムが望ましいが、入りきらないのではないか。５歳児と１年生が１枚になっていることで架け橋期の学びが捉えやすい。学校・園所には、教育課程や指導計画があるので、架け橋期のカリキュラムの「架け橋期」に特化したものがよいのではないか。

５．自治体の支援

５－１．研修の実施

＜実施した研修の概要＞

令和４年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4 月 ～5 月	保こ幼・小合同研修会 （1 年生スタート期）	連携校区小学校に集合	公立就学前施設 ５歳児担任又は令和３年度５歳児担任・公立小学校 1 年生担任・それ以外の希望する教職員、希望する私立就学前施設教職員	○高松っ子いきいきプラン改訂版活用資料『子どもの学びをつなぐ』 ○映像視聴 ○保こ幼教職員が小学校で１年生の授業参観等 ○小学校での参観を基に、協議及び今年度の交流・連携年間計画を立てる。
6 月 14 日	第１回保こ幼副所長・主任研修会	オンライン	公立保育所副所長、こども園主任及び現職教育主任、幼稚園主任	○演習 「子どもの学びを見取るために～事例分析を通して」
8 月 1 日	保こ幼・小合同研修会 （全体研修）	オンライン	公立就学前施設５歳児担任 公立小学校１年生担任 希望する私立就学前施設教職員	○講話 「保こ幼・小連携教育の推進」 ○グループ講義 「育ちや学びをつなぐ～接続期子の子どもの姿からカリキュラムの改善を行う」
2 月 15 日	第 3 回保こ幼副所長・主任研修会	集合研修	公立保育所副所長、こども園主任及び現職教育主任、幼稚園主任	○座談会 「幼保小の架け橋プログラムの取り組みについて」

令和５年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4 月 ～5 月	保こ幼・小合同研修会 （1 年生スタート期）	連携校区小学校に集合	公立就学前施設５歳児担任又は令和４年度５歳児担任 公立小学校 1 年生担任・それ以外の希望する教職員 希望する私立就学前施設教職員	○事前オンデマンド映像視聴 ○授業参観 ○協議 ・１年生の授業や生活の様子の参観を通して児童の学びの姿を伝え合い、それを支える教師の指導・支援について話し合う。 ・交流・連携年間計画を作成。 ・連携・接続のスモールステップの指標を確認する。
6 月 13 日	第１回保こ幼副所長・主任研修会	集合研修	公立保育所副所長、こども園主任及び現職教育主任、幼稚園主任	○グループ協議「乳幼児期の教育・保育の充実に向けて～事例分析を通して～」
8 月 4 日	保こ幼・小合同研修会（全体研修）	連携校区小学校に集合	公立就学前施設５歳児担任 公立小学校１年生担任 希望する私立就学前施設教職員	○講話 「保こ幼・小連携教育の推進」 ○協議 「互恵性のある交流活動について」 ・趣旨説明 ・架け橋プログラム開発校区の取組紹介 ・協議
1 月 ～3 月	保こ幼・小合同研修会 （5 歳児アプローチ期）	連携校区就学前施設等に集合	公立就学前施設５歳児担任 公立小学校１年生担任 希望する私立就学前施	○事前オンデマンド映像視聴 ○保育参観 ○協議 ・「子どもの学び・トークシート」「交

			設教職員	流・参観Memo」を活用し、遊びの中の学びやそれを支える保育者の支援・環境構成について振り返る。 ・連携校区の実態に即した学びをつなぐ接続期カリキュラムの充実と改善 ・今年度の取組の評価と次年度への引継ぎ
2月14日	第３回保こ幼副所長・主任研修会	集合研修	公立保育所副所長、こども園主任及び現職教育主任、幼稚園主任	○協議「高松っ子いきいきプラン改訂版子どもの学びをつなぐを活用した取組について」 ○座談会「幼保小の架け橋プログラムの取組について」

令和６年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4月 ～5月	保こ幼・小合同研修会 （1年生スタート期）	連携校区小学校に集合	公立就学前施設５歳児担任又は令和５年度５歳児担任 公立小学校１年生担任 それ以外の希望する管理職・教職員 希望する私立就学前施設教職員 希望する管理職も含む	○事前オンデマンド視聴 ○授業参観 ○協議 ・１年生の授業や生活の様子の参観を通して、児童の学びの姿を伝え合い、それを支える教師の指導・支援について話し合う。 ・共に育てたい子どもの姿を共通理解する。 ・今年度の校区の連携・接続の目標を共有する。 ・交流・連携年間計画を作成。
7月30日	保こ幼・小合同研修会 （全体研修）	連携校区小学校に集合	公立就学前施設５歳児担任 公立小学校１年生担任 それ以外の希望する管理職・教職員 希望する私立就学前施設教職員 希望する管理職も含む	○座談会 「幼保小の架け橋プログラム in たかまつ」開発校区の取組紹介 ○協議 「互恵性のある交流活動について」
6月11日	第１回保こ幼副所長・主任研修会	集合研修	公立保育所副所長、こども園主任及び現職教育主任、幼稚園主任	○グループ協議「乳幼児期の教育・保育の充実に向けて」
1月 ～3月	保こ幼・小合同研修会 （5歳児アプローチ期）	連携校区就学前施設等に集合	公立就学前施設５歳児担任 公立小学校１年生担任 それ以外の希望する管理職・教職員 希望する私立就学前施設教職員 希望する管理職も含む	○事前オンデマンド映像視聴 ○保育参観 ○協議 ・５歳児の遊びや生活の参観を通して、遊びの中の学びや保育者の支援・環境構成について話し合う。 ・子どもの実態に即した架け橋期のカリキュラムの改善。 ・小学校スタートカリキュラムに取り入れたいことについて伝える。 ・今年度の取組の成果や課題等を確認し、次年度へ引継ぐ。
2月12日	第３回保こ幼副所長・主任研修会	集合研修	公立保育所副所長、こども園主任及び現職教育主任、幼稚園主任	○グループ協議 「幼児教育と小学校教育の連携・接続について」 ○協議・座談会「幼保小の架け橋プログラムの取組について」

＜研修の成果と課題＞

【保こ幼・小合同研修会（１年生スタート期・全体研修・５歳児アプローチ期】

・令和４年度は、感染症対策で研修参加者の人数制限や対面での実施が難しい校区もあったが、年度当初に管理職や研修受講者に幼小接続カリキュラム PDCA スケジュールを示し実施してきたことで、年々研修が定着しつつある。

・私立就学前施設は希望参加であるが、研修の定着、研修を通して教職員関係の構築、交流活動が充実しつつあることから、参加施設が年々増えている。

全体研修　私立就学前施設参加施設数

令和３年度…５０/７７施設（７５%）

令和６年度…７１/７７施設（９２%）

・１年生スタート期、全体研、５歳児アプローチ期、それぞの時期に大事にしたい協議内容を明確に示した。各校区で実施できるようにオンデマンド映像を作成を行い、研修受講者は事前視聴することを呼び掛けた。協議内容や方法を理解し、各校区で実施することができた。

・各連携校区の小学校等を会場にして研修を実施することで、気軽に参加しやすい状況になった。

全体研修　参加人数

令和５年度…小学校　９０人、公立就学前施設１２０人、私立就学前施設　７８人

令和６年度…小学校１１１人、公立就学前施設１１６人、私立就学前施設１０３人

・全体研修での講話を通して「具体的なヒントを得ることができた。」、座談会を通して「開発校区の具体的な取組を映像と共に見ることができ交流活動がイメージしやすかった。」「何か新たに始めるのではなく、これまでのものを生かし、互いの経験や「共に育てたい子どもの姿」を共通理解して取り組むことが大事だと感じた。」、協議を通して「複数の連携施設があるが、一堂に集まり意見交換でき有意義な時間であった。」「伝え合い、知り合い、協力し合うことは、子どもだけの経験ではなく、連携校区の教職員にとっても必要であると感じた。」という受講者の感想があった。

・研修受講者から「研修に位置付けることで連携校区の教職員が一堂に会して、じっくり話し合う機会になっている。」「施設によって意識の違いは大きいので、引き続き、教育委員会から全校種への啓発を続けて欲しい。」という今後の研修についての意見があった。また、研修を実施する中で、今年度の取組を次年度に生かすことや引き継ぐことが難しい校区が多いように感じる。

・令和４年度以降、互恵性のある交流活動の実施が見られる。今後は、５歳児の学びを１年生につなぐということにも意識できるよう、スタートカリキュラムの見直しにも着手する必要がある。

【公立保育所こども園幼稚園副所長・主任研修会】

実施日	実施形式	内　　容
令和４年 ６月14日	オンライン研修	○グループ協議「子どもの学びを見取るために～事例分析を通して～」 「子どもの学び✿トークシート」を活用して
令和４年 ７月～1月	各施設	○課題研修「こどもの学び・トークシート」を活用した取組 ～５歳児の事例（７月～１１月）～
令和４年 ２月15日	集合研修	○座談会「幼保小の架け橋プログラムの取組について」 パネラー：開発校区就学前施設代表者
令和５年 ６月13日	集合研修	○グループ協議「乳幼児期の教育保育の充実に向けて～事例分析を通して」就学前施設の子どもの学びと１年生の学びのつながり（生活科）
令和５年 ７月～1月	各施設	○課題研修「高松っ子いきいきプラン改訂版『子どもの学びをつなぐ』を活用した取組について」
令和５年 ２月14日	集合研修	○座談会「幼保小の架け橋プログラムの取組について」 パネラー：架け橋開発校区副所長・主任
令和６年 ６月11日	集合研修	○グループ協議「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと」を用いて　連携校区グループに分かれて協議
令和６年 ７月～1月	各施設	○課題研修「高松っ子いきいきプラン改訂版活用資料「子どもの学びをつなぐ」を活用した取組について」
令和６年 ２月12日	集合研修	○グループ協議「幼児教育と小学校教育の連携・接続について」 ○座談会・協議「幼保小の架け橋プログラムの取組について」 パネラー：架け橋開発校区副所長・主任

◆令和４年度

・子どもの経験していることからどのような力が育まれているかを「たかまつ」の視点や資質能力の３つの柱などで省察し、多面的に考えていくことの大切さを学ぶ機会を設けた。「子どもの学び✿トークシート」の活用の有効性を確認した。

・開発校区の副所長・主任によるパネルディスカッションでは、参加者から「できることからのスモールステップが大事」「校区で進め方は違うが、円滑な接続のための取組を知ることができてよかった」等感想があった。

◆令和５年度

・グループ協議で０歳児から５歳児までの学びの分析を通してそれぞれの年齢で経験や学びがあり、０歳児からの経験や学びが小学校以降の学習につながっていることを再確認した。「０～５歳児までの学びの積み重ねの先に、小学校の学習があることを可視化できた」「５歳児だけが就学前でないことを改めて理解できた」との感想が聞かれた。

・座談会では、「自施設でできるところからまず取り入れていき、今年度の成果等を職員で共通理解しておきたい」「つなぐ役割を務め、『伝える力』も付けていきたい」との感想があった。

◆令和６年度

・文部科学省の「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと」を活用し、幼児教育の遊びが小学校教育のどの教科等につながるのかという視点をもって研修を行った。「小学校以降につながることを意識し、子どもの学びを考えていくことの大切さが分かった」「校区の先生と研修ができたことは、今後の交流に向け、有意義で意味がある研修だった。」「普段現教でしている『子どもの学び✿トークシート』と考え方が同じだったので、まとめやすかった」等の感想があった。

・小学校教育の連携・接続についてのグループ協議では、「同じ校区の職員と、情報交換や小学校との連携の工夫について考える機会となった」「次年度架け橋コーディネーターの活用も考えたい」等の感想があった。

５－２．教材等の作成

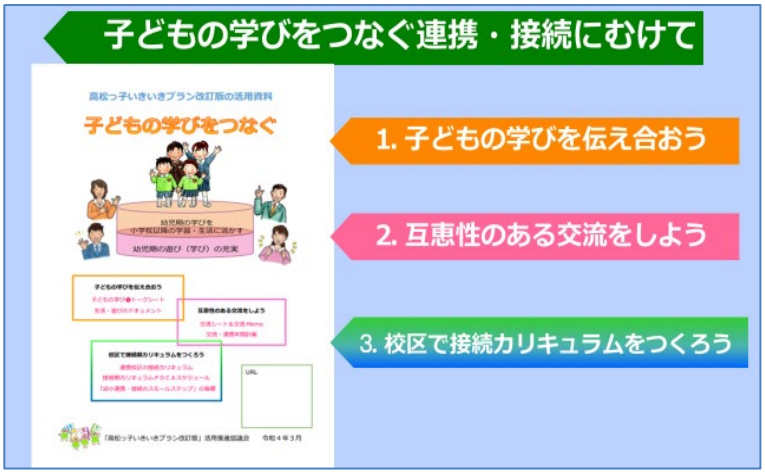
＜作成した教材等の概要＞

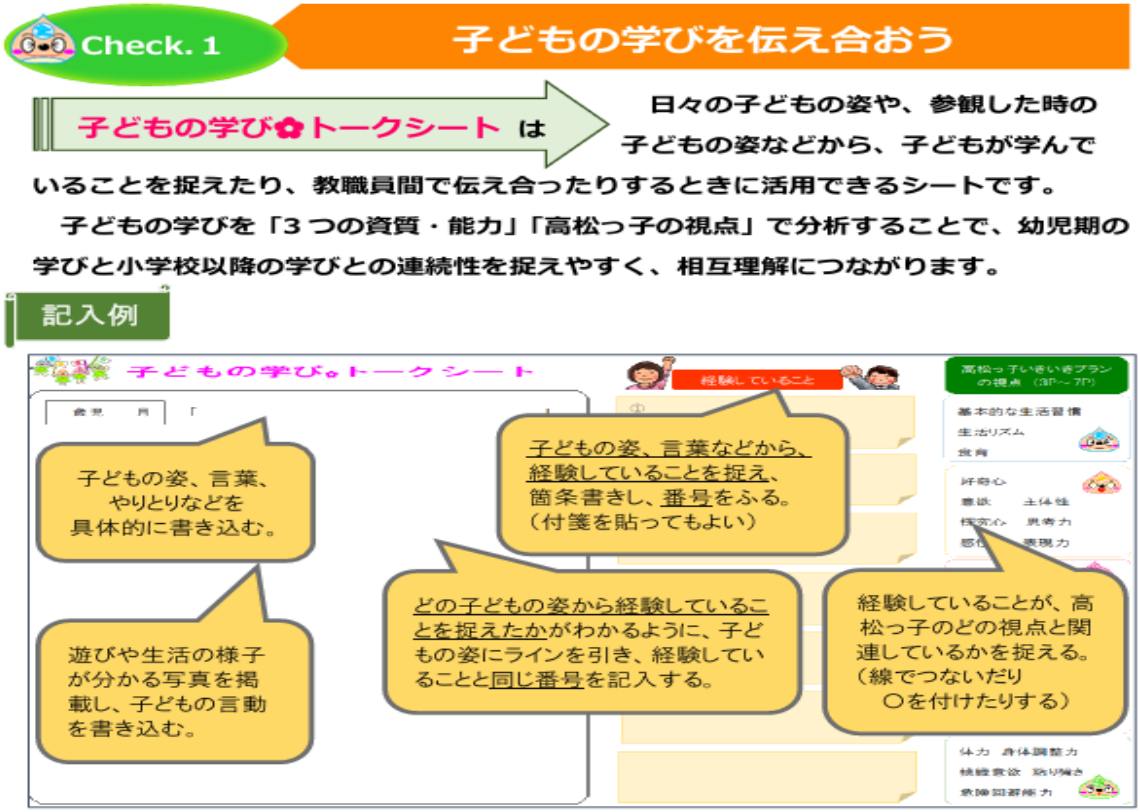
（冊子：高松っ子いきいきプラン改訂版の活用資料「子どもの学びをつなぐ」～令和７年度版～）

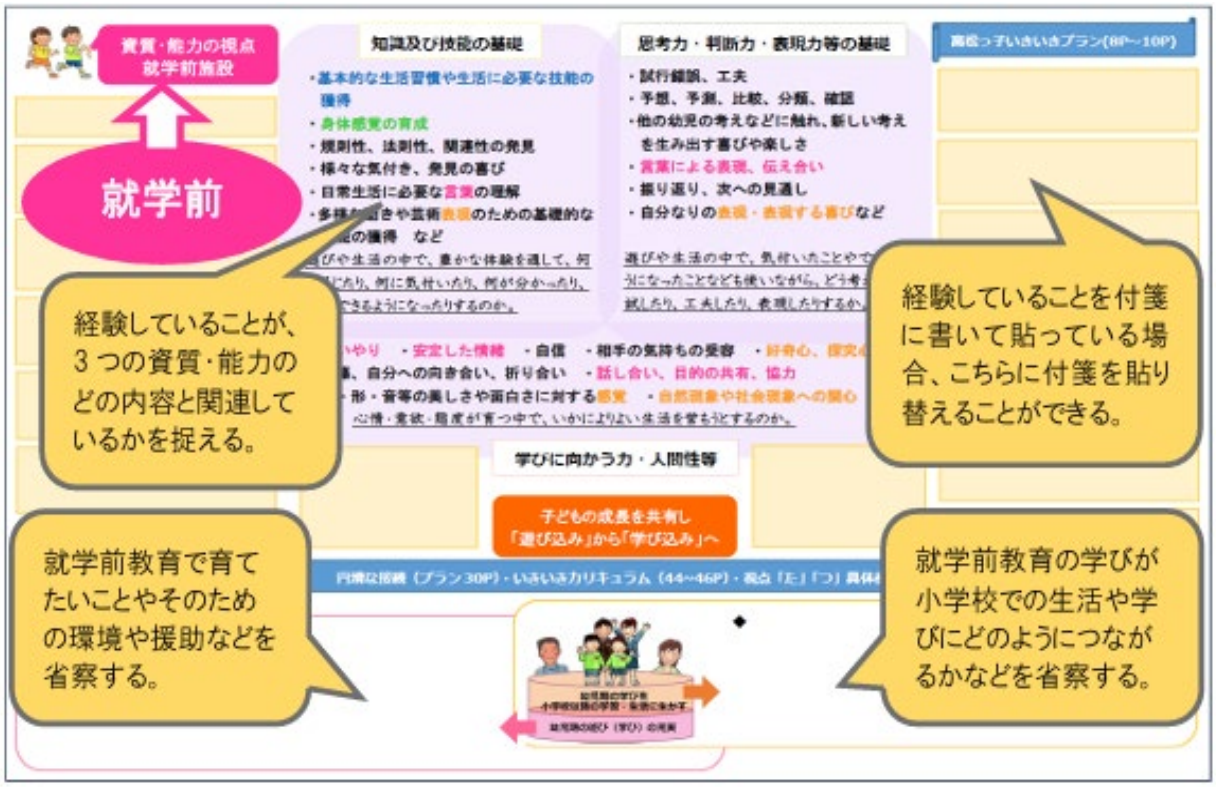
本市では、「自ら考え主体的に行動できる豊かな心と健やかな体をもった子ども」を育てていくことをめざし、全ての子どもたちが質の高い教育・保育を受けられるよう、乳幼児期から小学校１年生で取り組む方向性を示した「高松っ子いきいきプラン」を令和２年３月に改訂し、各保育所、こども園、幼稚園、小学校での活用を推進してきた。

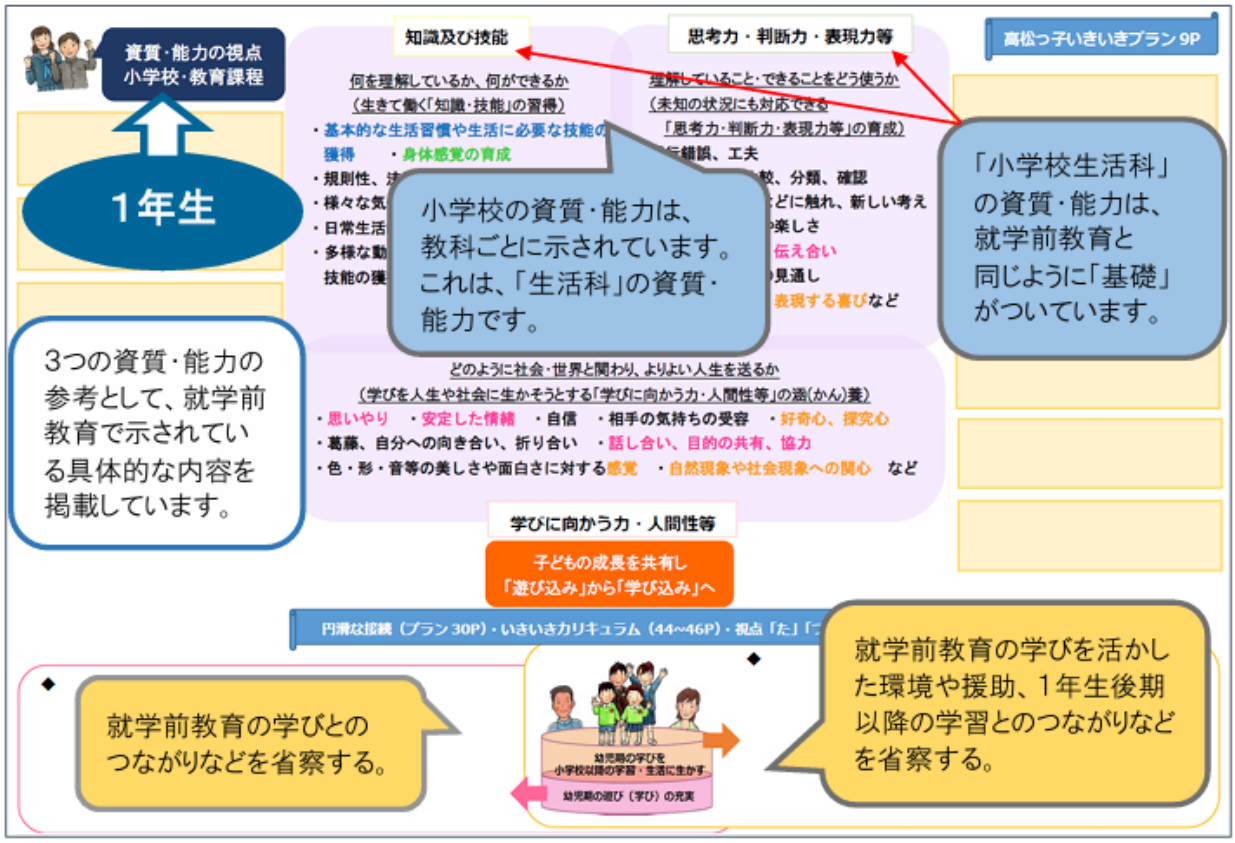
乳幼児と小学生の交流活動や入学前の個別支援の引継ぎなどは、これまで多くの施設で実施されてきたが、子どもの学びをつないでいくための連携・接続となるために、保育者と小学校教員が、互いの教育・保育内容を理解し、子どもの学びを共有する取組をさらに推進していく必要があった。

このことから、令和３年度に「高松っ子いきいきプラン改訂版活用推進協議会」を設置し、「高松っ子いきいきプラン」の中でも「就学前教育と小学校教育の円滑な接続」に焦点化し、子どもの学びをつなぐ連携や接続へとステップアップできるよう、交流活動やカリキュラム編成、授業・保育参観などの際に活用できるシートや具体例などをまとめ、「高松っ子いきいきプラン改訂版の活用資料『子どもの学びをつなぐ』」を作成した。









他の活用シートについては、「高松っ子いきいきプラン改訂版の活用資料『子どもの学びをつなぐ』～令和７年度版～」内の活用方法を参照。

1．子どもの学びトークシート　幼児用（６P）

3．学びのつながり分析シート
幼⇒小　小⇒幼　**New**

2．子どもの学びトークシート　小学生用（７P）

4．活動・遊び✿知っトクシート
（７P）

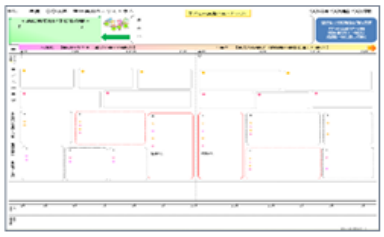
5.交流・連携年間計画
（３３P）

6．交流シート
（３３P）

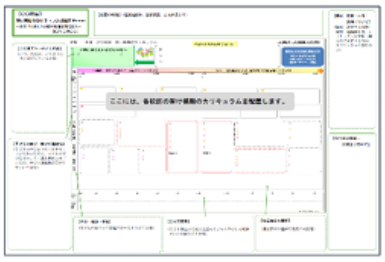
7．交流・参観 Memo①
（３４P）

8．交流・参観 Memo②
（３８P）

9．架け橋期のカリキュラム
参考様式
Renewal（３９P）



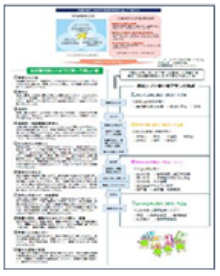
10．架け橋期のカリキュラム
引継ぎ Memo　**New**



13．幼小連携・接続の
スモールステップの指標
（４６P）

11．幼小接続カリキュラム
PDCA スケジュール
Renewal（４５P）

12．交流・参観　参考資料
Renewal（３８P）



「子どもの学び✿トークシート」等を活用した子どもの学びの共有

〇活用シートの様式をＨＰからダウンロードできるようにしたことから、私立施設を含め、市内全施設で共有でき、連携校区での合同研修会で活用することができた。

〇各種研修会で活用し、子どもの姿を中心に対話し、学びを共有できるようにした。

＊保こ幼・小合同研修会

＊保こ幼教職員研修会　・初任者研修　・２年経験教職員研修　・５年経験教職員研修
・新規会計年度任用職員研修　・子ども理解研修

＊公私立保育所・こども園・幼稚園管理職研修会

〇子ども理解を深め、授業・保育改善につなげられるよう、各施設内研修での活用を推進した。

〇開発校区の校区別会議では、協議後、書き込まれたトークシートを撮影し開発校区内で共有できるようにし、当日協議に参加できなかった学校・園所の教職員とも取組内容を共有できるようにした。

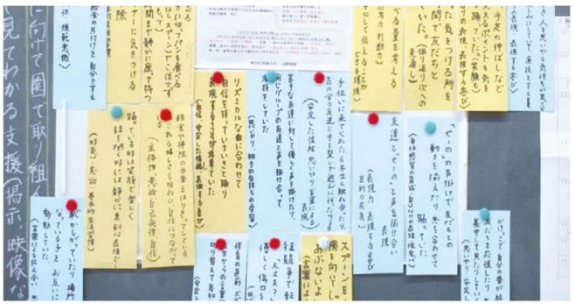
＜教材等の成果と課題＞

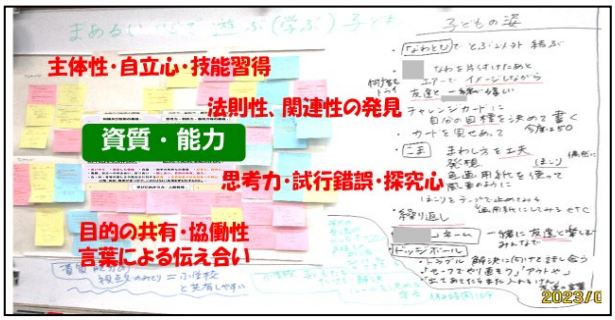
①保こ幼・小合同研修会での活用

<table>
<tr><th></th><th>就学前教職員</th><th>小学校教員</th></tr>
<tr><td rowspan="2">成果</td><td>◆遊びの中の学びの見取り
・子どもの姿を高松っ子の視点と照らし合わせて見ることで、改めて何が育っているかが分かった。
◆学びを伝える
・トークシートの活用を通して、育ちを言語化しながら共通理解が図られた。さらに、言語化することで他校種の先生にも子どもの学びが伝わるようになった。</td><td>◆子どもの見方の変化
・小学校では、集団の育ちとして捉えがちだが、こども園の先生は子ども一人一人の気付きを見取っていてすごいと感じた。育ちに目を向けることの重要性に気付かされた。
・複数で話し合うことで自分が気付かなかった１年生の子どもの行動の中に学びに気付いた。
◆遊びの中の学びの理解
・幼保の子どもがどのような活動や経験をしているのか具体的に分かった。</td></tr>
<tr><td colspan="2">◆共通のシートや視点があることで、子どもの学びについて互いに伝えやすい。
・共通のシートをもとに顔を合わせて話す機会になり、気軽に対話できる関係につながった。
・子どもの姿を伝え合う時に、たかまつの視点や資質能力とつなげて考えることができる。
◆トークシートに書き込み、可視化することで、子どもの学びを共有しやすい。
・多面的に学びを捉えることで、教職員の子どもを理解する力が向上し、互いの関係性が良好となった。
・「安心感」「主体性」「思考力」など、遊びの中の学びが見えやすく、子どもの学びに気気付くことができる。それを共有できる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">課題</td><td>・学びを見取った後、育ちを支える支援や環境について改善していくこと。</td><td>・話し合う時間の確保</td></tr>
<tr><td colspan="2">・子どもの学びから、教職員の支援、環境や教材について評価・改善するには、時間が必要。時間の確保や視点を絞るなど、協議の方法について工夫が必要。
・共有された子どもの育ち、支援、環境を接続期カリキュラムに反映させていくこと。</td></tr>
</table>

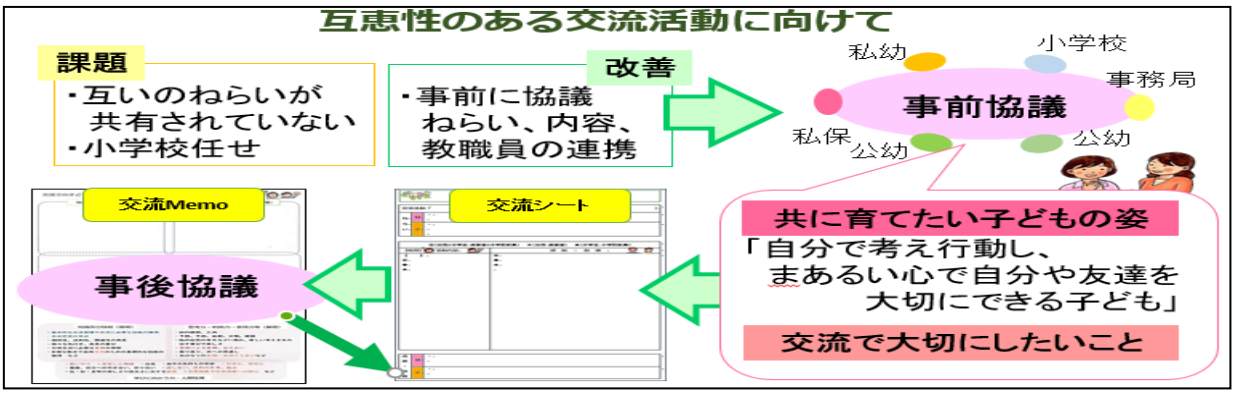
②園内研修での活用

	就学前教職員
成果	・トークシートを活用し、正規職員だけでなく、会計年度の先生も含めて話し合うことができた。 ・園内の教職員で話し合うことで、どのように 0 歳から 5 歳まで育ちがつながり、小学校以降の学習や生活につながるかを考えることができた。 ・職員連携が進んだ。 ・就学前の学びの保障につながる。





③互恵性のある交流活動に向けての活用



◆成果

・「交流シート」や「交流メモ」があることで、話合いがしやすく、交流の壁が低くなった。
・小学校任せではなく、共に交流活動を進めていく意識が高められた。
・交流を考える際に、事前に小学校の生活科の目標と、園のねらいを伝え合い記入していったことで、支援の方向性を共有し、具体的な教職員の支援など計画することができた。
・連携校区の「共に育みたい子どもの姿」をめざした交流にむけて、小学校と就学前施設の教職員が一緒に計画し、協議したことを「交流シート」に書き込み交流活動の内容を共有し実践できた。
・交流後、「交流メモ」を活用し、子どもの学びを資質・能力の観点から見取ることができた
・協議を通して明らかとなった成果や改善点を「交流シート」に書き込むことで、交流して終わりではなく、３つの資質・能力の視点から、交流活動での育ちを確認することができた。
・「子どもの学び✿トークシート」を使って活動の中での学びを伝え合うことで、就学前の子どもにとっても小学生にとっても、主体性が育まれるような環境や支援の必要性を共有できた。

共に育てたい子どもの姿　まあるいゆめで遊ぶ（学ぶ）子ども

交流活動「　秋を見つけよう　」　4年11月8日（場所 [illegible]）

ねらい
幼　○ペアの小学生と触れ合い、親しみを感じる。
・ペアの友達の名前を知り一緒に遊ぶ。
・１年生の姿を見てやってみようとしたりやってみようと思ったりする。
小　○ペアの年長児とのふれあいを通して、年下の子を思いやる気持ちをもつ。
・ペアの友達の名前を呼び、交流をする。
・ペアの友達に合わせて一緒に遊ぶ。
○学校の周りの秋を探し、秋の自然の変化の様子に気付くことができる。

◎(幼児と小学生・保育者と小学校教員)　★(幼児・保育者)　◆(小学生・小学校教員)

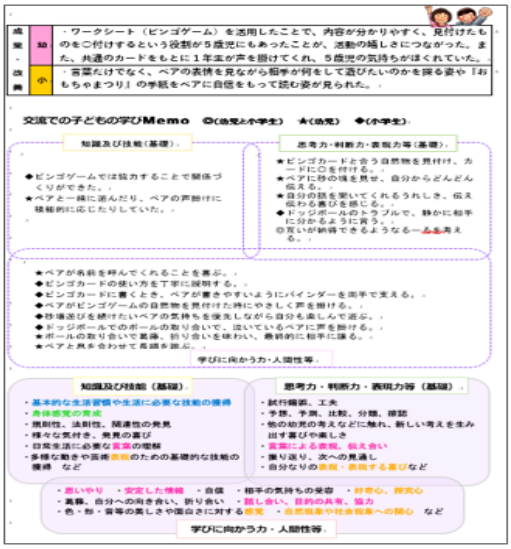
【時間】活動内容　保育者や小学校教員の援助・指導

1歩・いるかぐみ1
＜月見ヶ原公園＞
【9:30～9:40】集合
○はじめましての会
・ペアとあいさつをする
【9:40～9:55】自由
○ペアで秋みつけをする
・公園にある秋を探しながら、ビンゴゲームを一緒にする。
【9:55～10:05】集合
・見つけた秋を発表し合う
【10:05～10:10】こども園へ移動

◎双方の教員が１年生や年長児に声を掛けることで安心感を支えるとともに１年生にとっての自信や年長児にとっての就学への期待感に繋がるようにする。
◆お互いに親しみをもって活動できるよう、こども園の友達を名前で呼ぶように声かけをする。
★ペアの友達が分かり、安心して活動に参加できるよう１年生と親密しをしたり、名前を呼んでくれたうれしさに共感したりする。
◆ビンゴの丸付けは、年長児が担当し、空欄の箇所は１年生が書き込むように役割分担をする。
◆こども園の友達に優しく声かけをしたり、協力したりできている児童を称賛する。
★１年生と一緒に秋を見付けた喜びや気付いたことを共有できるように声掛けをする。

＜こども園＞
【10:10～10:20】休憩
【10:20～10:50】集合→自由
○園庭でペアと一緒に遊ぶ。
【10:50～11:00】集合
○活動の振り返りを発表し合う
○「あきのおもちゃまつり」の招待状を渡す

◆１年生が遊ぶなどをお手本で見せたり教えたりできる用具をこども園の先生に準備してもらっておく。（長縄・ボッピング）
◆ペアに頼られなくてもよいが、こども園の友達のことを気にかけて行動するように声かけをする。
★１年生に見てもらうことで、親しみを感じたりやってみようとしたりする気持ちに繋がるよう声を掛ける。
★招待状をもらったうれしさや次回の交流を楽しみにする気持ちをみんなで共有する。


成果・改善
幼　・ワークシート（ビンゴゲーム）を活用したことで、内容が分かりやすく、見付けたものをご付けするという役割が５歳児にもあったことが、活動の楽しさにつながった。また、共通のカードをもとに１年生が声を掛けてくれ、５歳児の気持ちがほぐれていた。
小　・言葉だけでなく、ペアの表情を見ながら相手が何をして遊びたいのかを探る姿や『おもちゃまつり』の手紙をペアに自信をもって読む姿が見られた。

交流での子どもの学びMemo　◎(幼児と小学生)　★(幼児)　◆(小学生)

知識及び技能(基礎)
◆ビンゴゲームでは協力することで関係づくりができた。
★ペアと一緒に遊んだり、ペアの声掛けに積極的に応じたりしていた。

思考力・判断力・表現力等(基礎)
★ビンゴカードと合う自然物を見付け、カードに○を付ける。
★ペアに秋の味を見せ、自分からどんどん伝える。
★自分の話を聞いてくれるうれしさ、伝え伝わる喜びを感じる。
◆ドッジボールのトラブルで、静かに相手に分かるように言う。
◎互いが納得できるようなる一ん考える。

★ペアが名前を呼んでくれることを喜ぶ。
◆ビンゴカードの使い方を丁寧に説明する。
◆ビンゴカードに書くとき、ペアが書きやすいようにバインダーを両手で支える。
◆ペアがビンゴゲームの自然物を見付けた時にやさしく声を掛ける。
◆砂場遊びを続けたいペアの気持ちを優先しながら自分も楽しんで遊ぶ。
◆ドッジボールでのボールの取り合いで、泣いているペアに声を掛ける。
◆ボールの取り合いで葛藤、折り合いを味わい、最終的に相手に譲る。
★ペアと息を合わせて長縄を跳ぶ。

学びに向かう力・人間性等

知識及び技能（基礎）
・基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得
・身体感覚の育成
・規則性、法則性、関連性の発見
・様々な気付き、発見の喜び
・日常生活に必要な言葉の理解
・多様な動きや表情表現のための基礎的な技能の獲得　など

思考力・判断力・表現力等（基礎）
・試行錯誤、工夫
・予想、予測、比較、分類、推論
・他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ
・言葉による表現、伝え合い
・繰り返り、次への見通し
・自分なりの表現・表現する喜びなど

・思いやり　・安定した情緒　・自信　・相手の気持ちの受容　・好奇心、探究心
・葛藤、自分への向き合い、折り合い　・話し合い、目的の共有、協力
・色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚　・自然現象や社会現象への関心　など

学びに向かう力・人間性等

	就学前　（○園児　◇教職員）	小学校　（○園児　◇教職員）
成果	○教職員の支援を共通理解しておくことで、就学前の子どもが安心して両方の先生に関わることができた。 ○就学前施設の子どもも、主体的に活動できたことで、交流活動後の遊びに自ら取り入れ工夫する学びにつながった。（知識・技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎） ◇小学校の生活科の単元計画を知り、保育者が１年生に関わる視点が分かった。	○保育者や幼児からの質問に、自分の経験したことを言葉や動作を使って伝える育ちが見られた。 ◇計画の際に互いのねらいや支援の方向性が分かり、小学校の教員も就学前の子どもへの支援「安心、自信につながる言葉掛け」をすることを共有した。 ◇小学生だけでなく、就学前の子どもの姿も捉えることができた。
	○就学前施設と小学生が自分の思いを出し合いながら活動でき、相手意識や親しみの気持ちを高めることができた。（学びに向かう力、人間性等） ◇交流活動は、先生同士が顔を見て話しをする機会になり、気軽に対話できる関係性が築けた。 ◇「交流シート」や「交流メモ」があることで、話し合いがしやすく、交流の壁が低くなった。	
課題	◇交流活動での支援について共有し、実践し、支援や環境について改善する。 ◇事前、事後の協議をする時間の確保。	

５－３．その他の支援

＜その他の支援の概要＞

連携校区のカリキュラムとしての位置付けと市全体での共有

【保こ幼・小合同研修会】（市内公私立就学前施設と小学校の教職員が参加）

◆第１回　＊小学校スタート期　（オンデマンド動画視聴・校区小学校に集合）
・各校区で開催日を決定　　・１年生授業参観・協議
・連携交流計画　　・共に育てたい子どもの姿や連携ステップの共有など
◆第２回　＊夏季休業中　（校区小学校に集合・オンライン会議）
・開発校区の取組を４つのステップの視点で伝える座談会と指導助言
・互恵性のある交流活動計画など
◆第３回　＊就学前施設アプローチ期　（オンデマンド動画視聴・校区就学前施設等に集合）
・各校区で開催日を決定　　・５歳児保育参観・協議
・架け橋期のカリキュラムとスタートカリキュラムの改善
・今年度の連携評価と次年度の計画など

【関係部局・団体代表者の取組等情報交換】

市内全ての校区での取組となるために、関係部局や団体の方が集まる本会議の場を活用し、推進方法を共に考え、情報交換をする場を設定し、連携を図った。

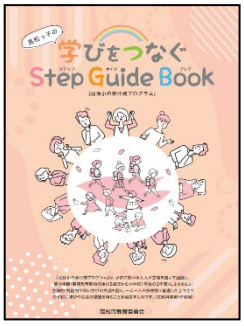
◆高松市教育委員会学校教育課
好事例紹介、小学校就学前教育の学びが生きる授業づくりの推進
◆高松市健康福祉局こども保育教育課
公私立の小学校就学前施設全体での共有、教育・保育の質の向上
◆香川県教育委員会義務教育課
先進的取組の発信、幼小連携・接続に関するコンテンツ
◆香川県総務学事課
好事例を私立幼稚園に紹介、主体的な学びへの支援・高松市教育委員会学校教育課
◆高松市立小学校長会
生活科や特別活動の部会とタイアップし改善
◆高松市立幼稚園・こども園長会
研修会参加、コーディネーター派遣、管理職間の関係構築
◆高松市公立保育所長会
取組報告、職員の意識向上、顔の見える関係づくり

【連携・接続の趣旨や方針、開発校区の取組の発信】

架け橋プログラムの趣旨や開発校区の取組などを、合同研修会で、紙面やオンデマンド、講話、座談会を通じて伝えてきた。就学前施設の教職員研修会でも、子どもの学び✿トークシートを活用し、子どもの学びを見取る研修を実施してきた。

架け橋プログラムに関する事例や情報をコンパクトにまとめた「つながるひろがる架け橋の輪 in たかまつ」を月１回程度発行し、管理職研修会で紹介し、総合教育センターHP に掲載した。

【参考冊子・リーフレットの作成、配付】



✤「高松っ子の学びをつなぐ Step Guide Book」
①学びをつなぐステップ・Ｓtep1～Ｓtep4
②連携・接続に活用できる参考資料・状況づくり・活用シート
③つながりひろがる架け橋の輪・架け橋プログラムのすすめ
・架け橋プログラムの趣旨や取組方法とともに、その具体例として、開発校区の実践を掲載し作成した。具体事例や写真などがあることで、どのように実践するのかイメージできる。

✤「みんなでつなごう 高松っ子の学び」
（Ｓtep Guide Book の概要版リーフレット）
・リーフレットは、架け橋プログラムについて広く、保護者や地域の方にも知ってもらえるように、写真を多く取り入れ、これからの連携・接続の取組がイメージしやすいように工夫した。

※電子データとして、総合教育センターHP で閲覧、印刷できる。
※市内全ての小学校、就学前施設、中学校、関係部局等に配付した。

【校区別会議を校区外にひらく】
＊令和６年度から、開発校区の協議に、他の校区からも参加できるようにし、取組を参考にし合ったり、開発校区の取組を市内の校区に広げたりした。

【開発校区以外への架け橋コーディネーター等の訪問】
＊４校区からの希望があり、次の内容についてのサポートを行った。
・交流活動の事前協議、交流参観、交流後の協議
・５歳児の保育参観、トークシートを活用した協議、架け橋期のカリキュラムやスタートカリキュラムの改善

６．本事業に取り組んだことによる成果

６－１．自治体における成果

＜自治体における成果＞

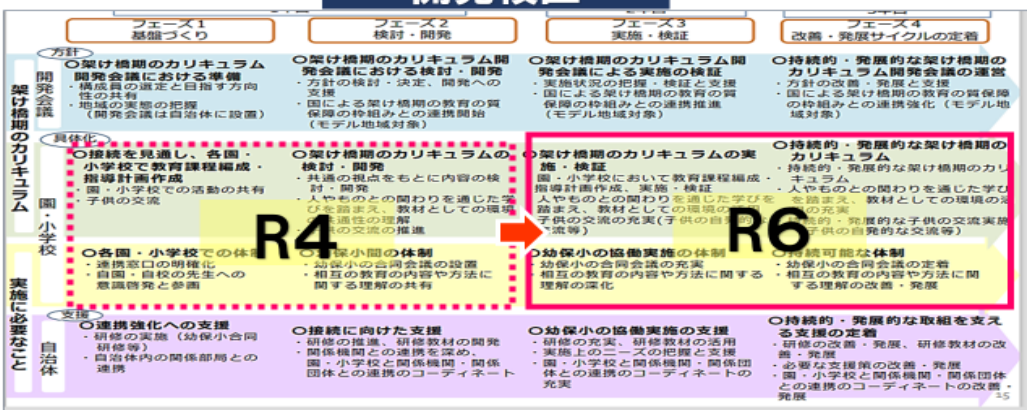
３年間の取組の成果をフェーズで示すと、自治体や開発校区は、２段階アップしてきた。

開発校区外においても、管理職の理解が進み、協働しながら交流活動を行う校区が増えてきた。

連携・接続の取組は、校区の実態や教職員の異動等により、前の年と同じように進めていくことが難しい状況になることもある。持続可能な連携・接続となるためにも、校区の実情に合わせて、行きつ戻りつしながら、スモールステップで取り組むことが大切である。

自治体

開発校区



高松市全校区

６－２．園校における成果

＜先生方の指導と子供の姿の変容＞

開発校区の成果

（１）気軽に対話できる教職員関係の構築

①まずは連絡・互いにひらく

「いつでも来てください」と学校・園所をひらくことで日常の散歩や現教の授業・保育等、いろいろな方法でお互いに良いタイミングで連携できるようになった。

②ちょこっと交流・ちょこっと参観

互いの施設を“ちょこっと”訪れるたびに親しみがもて、遊びや学習の内容を知ることにつながっていった。

③管理職間の連携

管理職間の連携が進むことで、教職員間での連携がしやすくなり、協働できる関係がつくられた。定期的な管理職間の会議が開かれるようになった校区もある。

④校区で「共に育てたい子どもの姿」を共有

気軽に相談できるようになり、子どもの姿を真ん中に対話することが増え、「校区の子どもを共に育てていこう」という意識が高まった。

（２）子どもの学びの共有と分析

①「子どもの学び✿トークシート」等の活用

・共通のシートで安心して意見を伝え、子どもの姿を中心に対話することができた。

・学びを可視化し共有することができ、遊びの中の学びを言語化し共通理解できた。

②互恵性のある交流

【子ども】

・安心して主体的に取り組み、相手に親しみをもち、相手の気持ちを想像しながら関わることができた。

・自分の思いや考えを表現し、満足感や達成感等を味わう等、より豊かな学びを得られた。

【教職員・保育・授業】

・幼児、小学生それぞれに学びが得られる内容を共に考えることができた。

・幼児と小学生それぞれの実態や、互いの教育・保育内容を知り、「子どもの学び」を共有することができた。

・子ども理解、保育・授業の質の向上につながった。

【保護者】

・学校・園所から交流活動の様子や子どもの学びを保護者に伝えることができた。

・保護者が安心し、学校・園所への信頼や理解につながった。

（３）連携校区の実態に即した架け橋期のカリキュラムの充実・改善

「子どもの学びの連続性」や「生活科を中心とした架け橋期のポイント」等に着目しながら改善が図られてきた。（４－３参照）

「安心感」「主体性」「コミュニケーション」をポイントにした「１年生スタートカリキュラム」の改善も図られてきた。

（４）持続可能な連携・接続

①全教職員で取り組む体制

・現職教育研修会に校区別会議を位置付ける等、架け橋期のカリキュラムを全教職員で理解できるようにした。

・小学校夏季休業中の保育参観の実施等、より多くの教職員が参観できるようにした。

✤「地域の子どもを共に育てよう」という連携意識が高まった。

✤架け橋期の学びと各学年との学びのながりを考えるようになった。

②取組を共有し引き継がれる体制

・カリキュラムの改善の根拠や考え方等取組の経緯が分かるように記録している。

・協議等の内容を「ドキュメンテーション」にし、回覧したりコメントを書き込んだりしたものを、次年度の教職員がいつでも見られるようにファイリングしている。

✤担任が替わっても引き継がれるように工夫し、体制づくりが行われている。

③保護者や地域との連携

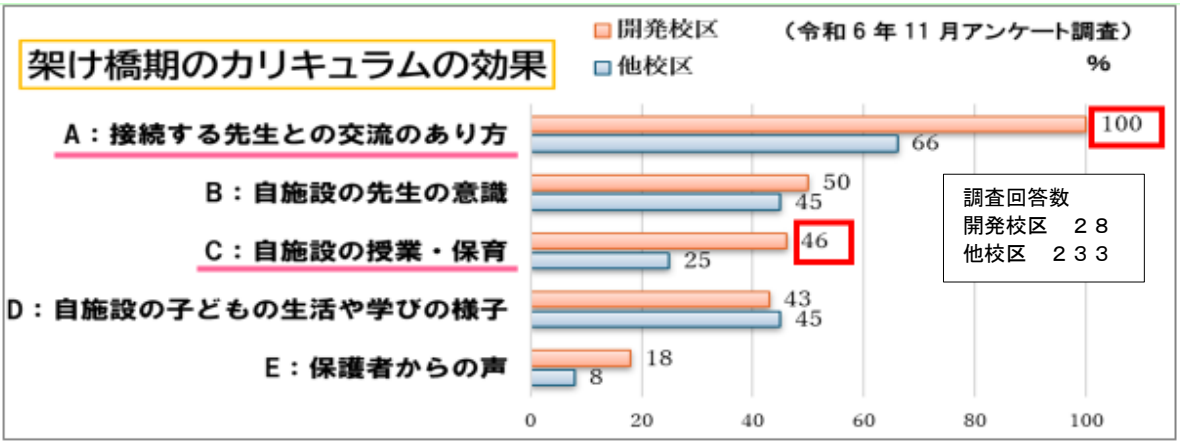
・学年便り、入学説明会、ホームページ、地域の会等で「架け橋プログラム」の取組や子どもの育ち等を周知している。

✤架け橋プログラムの取組への関心が得られた。

✤「校区の子どもを共に育てよう」という意識が広がりつつある。

（５）架け橋期のカリキュラムの効果

開発校区は、他校区と比べ、気軽に対話できる教職員関係が構築されたことに加え、主体性や学びの連続性を意識した保育・授業改善が図られている。



子どもへの関わりや指導方法の変化

（記述回答より抜粋）

◆就学前施設教職員

・０歳児からの経験の積み重ねのうえに５歳児の学びがあり、小学校の学びにつながっていくことを意識するようになった。

・就学後の学びを見通して、目の前の子どもの学びに必要な支援や環境について考え、指導計画を見直すようになった。

・子どもの主体性を意識しながら、環境を考えたり子どもたちに関わったりするようになった。

◆小学校教職員

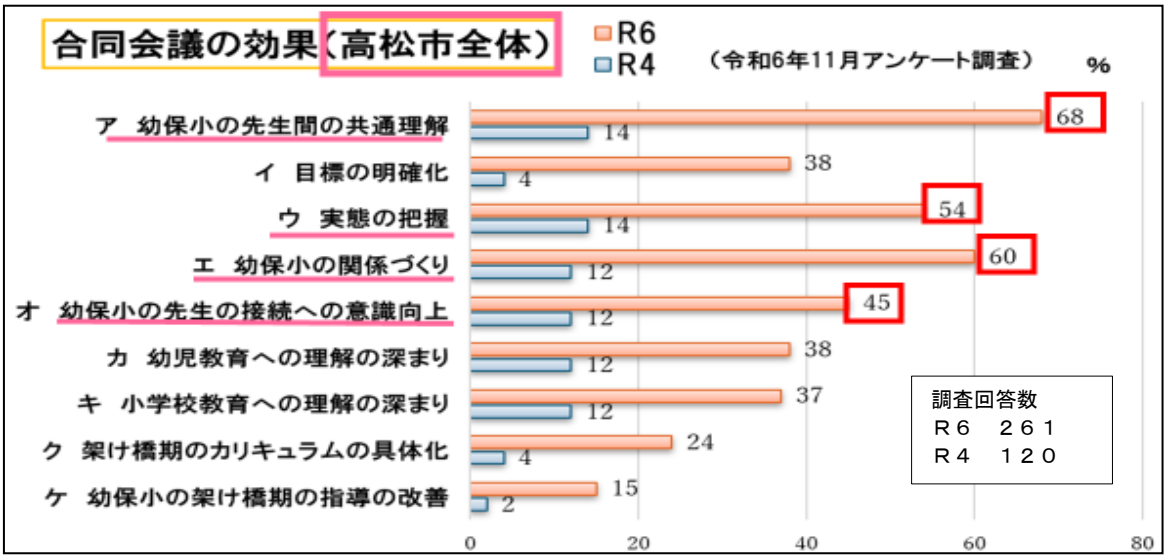
・子ども理解が深まり、子どもの関わり方を見直せるようになった。

・こちらから指示を出すよりも、児童に「どうしたらいいと思う？」と、子どもが主体的に思考し、行動できるような問いを意識するようになった。

・子どもの声や実態を大切にし、就学前施設での経験や子どもの意識の流れを配慮した授業づくりを意識した。

（６）「合同会議の効果」について（本市全体）

令和４年度と比較すると、校区の教職員間の共通理解、学校・園所間の連携、実態把握などが進み、子どもの学びの接続への意識が高まってきた。



開発会議・幼保小の接続における成果

◆開発校区

・他校区の会議に参加し取組を知ることで、自校区での実践のイメージがもて連携の参考になった。

・校区外の先生方に参観していただき、意見をいただくことで多面的多角的に実践を見直せた。

・いろいろな学年の職員が自ら携わるようになってきたことで担任の負担は軽減している。

◆市内全校区

・研修会を通じて開発校区の取組が、他の校区へ広がり始め「入学した１年生が、これまでより明るく元気に学校生活を送れている。」という声が多くなった。

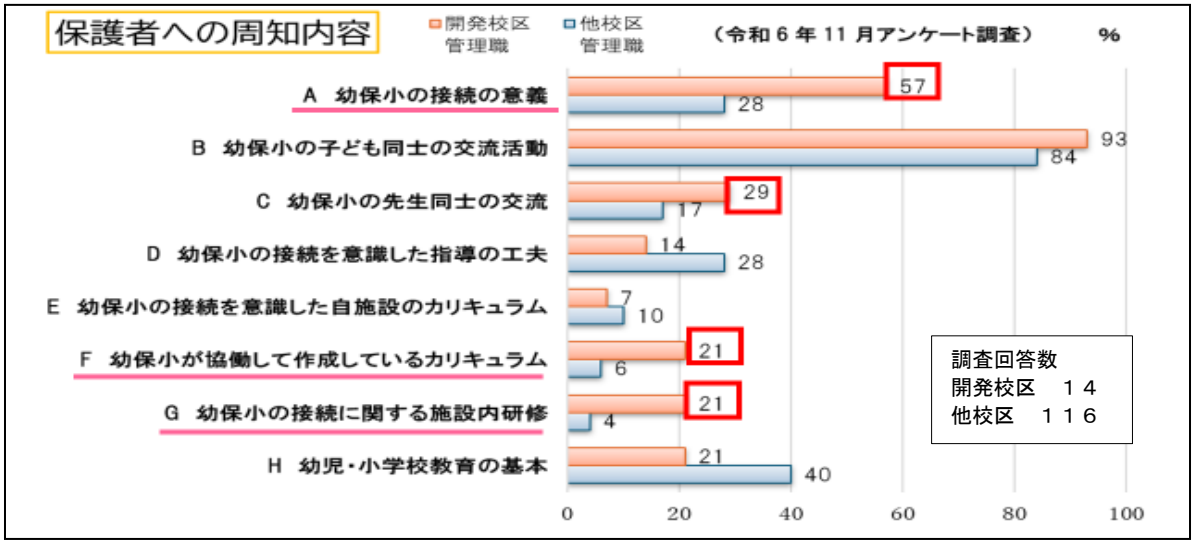
・令和６年７月末時点の１年生の不登校児童数は、前年に比べ減少していることが分かった。

・架け橋プログラムの取組が、他の校区へも広がり始めている。

（７）保護者への周知について

開発校区も他校区も、交流活動についての周知を行っているが、開発校区は、接続の意義についても周知するようになってきたことが分かった。

記述回答でも、子どもが家庭で小学校のことについて話す機会が増え、護者の安心感や関心、子どもの入学への期待感につながっていることが伺えた。



（開発校区の記述回答より抜粋）

【小学校】

・交流活動が楽しかったと児童がいつも話している様子が、保護者との会話や連絡帳の記述から感じる。

・幼小連携に関わる担任に寄せられる連絡帳の声や、ブログの閲覧件数の増加から感じる。

・幼小連携に関わる保護者の学校評価が上がった。

【就学前施設】

・就学に向けて不安に感じていた保護者が安心感を抱いていた。

・子ども自身が交流活動のことを保護者に伝える場が増えたようで、子どもの就学への期待や安心感が保護者の安心になっているという話をよく聞く。

・就学に向けての個別相談や見学で小学校へ行く敷居が低くなった。

７．今後の課題と展望

令和４年度より「子どもの学びをつなぐ持続可能な保こ幼小連携・接続」を高松市のテーマとし、①気軽に対話できる教職員関係の構築、②子どもの学びの共有と分析、③連携校区の実態に即した架け橋期のカリキュラムの充実・改善、を研究の柱として取り組んだ。

その成果として、開発校区では、気軽に対話できる教職員の関係が構築され、子どもの学びをつなぐ保育・授業づくりや、校区の子どもを共に育てようという意識が高まってきた。

また、その成果を公立学校・園所の管理職研修会等での周知や、参考資料等の提供、合同研修会での実践発表等を発信してきたことにより、他の校区においても、互恵性のある交流をめざした取組が進んできた。

しかしながら、市内には、多数の就学前施設のある小学校区や施設間の距離等様々な理由から、幼小連携・接続に課題がある校区も多く、各校区の実情に即したコーディネートが必要である。また、前年度に校区で共通理解したことが、次年度引き継がれにくいため、担任が替わっても引き継がれる施設内の連携や体制づくりやツール等を発信していく必要がある。

そこで、まずは、合同研修会により多くの教職員や管理職が参加し、校区の子どもの学びについて対話できる体制をつくり、参考冊子「高松っ子の学びをつなぐ Step Guide Book」等を基に、「子どもの学びの連続性」「教職員の協働」「校区の実態に即した架け橋期のカリキュラムの改善」を意識した連携・接続を市内全校区で推進していきたい。

さらに、「子どもの学びをつなぐ持続可能な保こ幼小連携・接続」をめざし、次のような取組を進めていきたいと考えている。

①関係部局等による連携・接続の推進方法についての協議を行う「推進会議」を設置する。
②「推進校区」を指定し、校区の実態に応じた連携・接続のサポートを行う。
③連携・接続のサポート希望校区等へコーディネーター及びアドバイザーを派遣する。
④令和６年度の開発校区教職員がこれまでの実践を基に近隣校区の取組のアドバイスを行う。
⑤大学教授の指導・助言を生かし、本市の取組の充実を図る。
⑥「高松っ子の学びをつなぐ Step Guide Book」を活用し、連携・接続に関する研修を行う。
⑦「気軽に対話できる教職員関係の構築」「子どもの学びの共有と分析」「連携校区の実態に即した架け橋期のカリキュラムの充実・改善」をポイントに、連携・接続の取組を啓発する。

そして、保護者や地域へ幼保小の架け橋プログラムの取組を発信し「みんなでつなごう高松っ子の学び」を合言葉に、子どもを真ん中にした架け橋の輪を広げていきたい。

８．まとめ

【幼保小の接続に必要なこと】

◆「地域の子どもを共に育てよう」という意識が、学校・園所全体に広がり、保護者や地域とも子どもの学びの場を共有しながら取り組む。

◆学びの連続性を踏まえ、学校・園所全体のカリキュラム・マネジメントとして取り組む。

ステップ１

✤まずは連絡・気軽に対話　　✤共に育てたい子どもの姿を伝え合う

まずは、就学前施設と小学校の教職員が、幼児教育、小学校教育について知りたいという関心をもち、「ちょこっと参観」「ちょこっと交流」等から連携を始める。

子どもの姿を真ん中に対話しながら、「目の前の子どもたちのよさを伸ばし、さらにこんな力を付けていこう」「校区の子どもを共に育てていこう」という意識を高める。

ステップ２

✤互恵性のある交流

就学前施設と小学校の教職員同士で、５歳児にとっても１年生にとっても学びになる交流について考え協働しながら進める。

新たにイベントとして行うのではなく、今ある教育課程や指導計画に位置付いていることや地域にあるものを生かしていく。

交流での子どもの学びを伝え合い、次の学習や遊び、次年度の交流に生かす。

ステップ３

✤子どもの学びを共有する　　✤架け橋期のカリキュラムを考える

子どもの学びをつなぐために、５歳児と１年生、それぞれの学びを知る参観や協議を行う。

参観した子どもの具体的な姿を基に、子どもの学びや教職員の支援、環境等を伝え合い「校区の架け橋期のカリキュラム」に反映させる。

ステップ４

✤持続可能な連携・接続　　✤地域の子どもを共に育てる

子どもの学びをつなぐ取組を持続可能にしていくために、管理職のリーダーシップのもと、学校・園所全体のカリキュラム・マネジメントとして校区で協働しながら取り組む。

カリキュラムを作ったら終わりではなく、毎年改善し、次の年に引き継いでいく工夫をする。保護者や地域へも写真やブログ等を活用して取組を周知し、「地域の子どもを共に育てよう」という共通の思いをもった連携を進める。

【幼保小の接続の更なる推進に向けての役割】

◆学校・園所が校区の実情に合わせ、教職員で協働しながら取り組めるようなサポート体制をつくる。

＊幼保小の架け橋プログラム推進会議　＊コーディネーターやアドバイザーの派遣

◆連携・接続に関する具体的な方法が分かる研修の実施や資料等を提供し、保護者や地域へもその取組等を周知する。

＊保こ幼・小合同研修会

・相互参観や協議の場　・開発校区実践発表　・座談会等

＊参考資料の発行やホームページ掲載

・ガイドブック　・リーフレット　・活用シート等参考様式　・事例資料等

◆関係部局、関係団体が架け橋プログラムの趣旨を理解し、それぞれの立場で取組を推進できるよう、情報共有できる場をつくる。

＊幼保小の架け橋プログラム推進会議等